



SYNTHESIS 2020

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2020



INDEX

01	研究所概要	01
02	月例研究報告	07
03	新所員研究概要	11
04	ランゲージラウンジ活動報告	33
05	語学検定講座報告	41
06	研究プロジェクト	47
07	研究業績	55

01

研 究 所 概 要

01

2020年度教養教育センター付属研究所概要

I. 組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：嶋田彩司

主任：石井友子 吉岡拓

研究部門運営委員：高桑光徳（春学期）・西香織（秋学期） 福山勝也

◆研究所所員

李善姫 池田昭光 石井友子 猪瀬浩平 植木献 上野寛子 塩谷祐人 大森洋子 亀ヶ谷純一
金珍娥 黒川貞生 小泉ユサ 洪潔清 篠崎美生子 嶋田彩司 杉崎範英 鈴木陽子 徐正敏
高木久夫 高桑光徳 田中祐介 張宏波 鄭栄桓 土屋陽祐 徳間晴美 中野綾子 永野茂洋
名須川学 西香織 野副朋子 長谷部美佳 福山勝也 三角明子 森田恭光 山内薫 吉岡拓
渡辺祐子 Constantinescu Cezar Elam Jesse MacLellan Dawn Thomas Dax
吉田真 諏訪間恵美 榎本翔太 中谷深友紀 安部淳

◆研究員

可部州彦 松山健作 黒田正明 池上康夫 石渡周二 鈴木義久 原田勝広 武光誠

II. 研究活動

1. 研究プロジェクト（*＝代表者）

①ひとびとの歴史を表現する：首都圏開発と市民活動の現代史的探究

*猪瀬浩平、長谷部美佳、植木献、可部州彦、荻村哲朗

②神山町旧村役場文書から見た人の移動に関する研究

*吉岡拓、鄭栄桓

③林京子と上海 ―共生／加害の記憶―

*篠崎美生子、洪潔清、渡辺祐子

④Revisiting Extensive Reading in the Digital Age: An Exploratory mixed Methods Study on Japanese University Students' Affective Responses

*Jesse Elam, Dax Thomas, Dawn Grimes-MacLellan

⑤大学生の体力的特徴 ―運動選手と非運動選手の比較―

*杉崎範英、森田恭光、諏訪間恵美

⑥筋と腱における「硬さ」の評価 ～超音波剪断波エラストグラフィを用いた測定とその妥当性～

*黒川貞生、榎本翔太、亀ヶ谷純一、中谷深友紀、土屋陽祐

※①、②、③、⑥については、2021年度も継続

2. 研究報告会

日付	報告者（敬称略）	テーマ
第1回（10/21）	高木 久夫	ヘブライ人たちの国家：スピノザ聖書解釈の一側面

Ⅲ. 教育活動

《学内語学試験》※今年度はコロナ禍により通常試験受験に制限があり、要望が多かったためオンライン受験の機会を提供

	校舎	日付	受験者数
TOEIC IP試験			
〈第1回〉	オンライン	9/10（木）～9/17（木） ※この間に1度のみ受験可	153名
〈第2回〉	オンライン	11/27（金）～12/4（木） ※この間に1度のみ受験可	155名
〈第3回〉	オンライン	2/22（月）～3/3（水） ※この間に1度のみ受験可	155名
TOEFL ITP試験→今年度の開催なし			

《講座》

◆短期講座・通年講座◆

	DELE試験準備講座				ドイツ語技能検定試験対策講座				TOPIK韓国語能力試験対策講座			
					3級		4級		TOPIK I		TOPIK II	
学期	春学期	秋学期	夏季集中	春季集中	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
実施期間	開 講 な し	10/7～ 12/2	9/7～ 9/11	3/1～ 3/5	開 講 な し	10/6～ 12/1	開 講 な し	10/7～ 12/2	開 講 な し	A:10/2 ～11/20 B:10/23 ～11/20	開 講 な し	10/1 11/19
校舎		オンライン (Teams/ manaba)	オンライン (Zoom)	オンライン (Zoom/ manaba)		オンライン		オンライン/ オンデマンド		オンライン (Zoom/ manaba)		オンライン (Zoom/ manaba)
教室												
曜時限		水曜 4限	初級 10:00 ～13:00 中級 14:00 ～17:00			火曜 5限		水曜 5限		金曜 5限		木曜 4限
回数	各：全8回		各10コマ (2コマ×5日)		各：全8回				各：全8回			
講師 (敬称略)	Luis Rabasco		初級 仲道 慎治 中級 Eugenio del Prado		小山田 豊		佐藤 修司		A：朴庚卿 (パク・ユギョン) B：金南昕 (キム・ナムン)		崔靜仁 (チェ・ジョンイン)	
募集人数	25名程度		各20名程度		10名程度		10名程度		20名程度			
エントリ 者数	春：一名 秋：11名		初級 10名 中級 8名	初級 11名 中級 5名	春：一名 秋：6名		春：一名 秋：9名		春：一名 秋：31名		春：一名 秋：15名	
2020年度 毎月 出席者数* (名)			初級 (6・3・ 3・3・3)	初級 (8・7・ 8・8・7)								
	10月(7・8・5・5) 11月(6・4・3) 12月(5)		中級 (5・6・ 5・4・5)	中級 (3・2・ 2・2・1)	10月(6・3・5・4) 11月(5・4・3) 12月(3)		10月(9・9・9・9) 11月(9・8・7) 12月(2)		A： 10月(25・20・ 10・8・9) 11月(9・7・7) B： 10月(10・7) 11月(8・6・6)		10月(11・9・6・ 5・3) 11月(3・2・3)	

*manabaコンテンツ閲覧数、小テストの学習状況、オンデマンド教材閲覧数等を含む

	中国語資格試験対策講座						実用フランス語技能検定試験対策講座		手話 特別講座	キャン プ インストラクター 資格講座
	中検3級・ HSK4級		中検4級・ HSK3級		中検4級・ HSK3級		仏検3級			
学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春季集中	秋学期
実施期間	開 講 な し	10/6～ 12/1	開 講 な し	10/6～ 12/1	開 講 な し	10/7～ 12/2	開 講 な し	10/23～ 11/20	2/24～ 2/26 3/4～3/5	開 講 な し
校舎		オンライン (Zoom / manaba)		オンライン (Zoom / manaba)		オンライン (Zoom / manaba)		オンライン (Zoom / manaba)	白金	
教室										
曜時限		火曜 2限		火曜 4限		水曜 3限		金曜 5限	3～4限	
回数	各：全8回						全6回	全5回	全10回	
講師 (敬称略)	鈴木 健太郎				黄宇暁 (コウ・ウギョウ)		檜垣 嗣子		荒木 泉 (ゲスト講師) 長田 静乃	
募集人数	各8名程度						15名程度			
エントリ 者数	春：一名 秋：6名		春：一名 秋：10名		春：一名 秋：7名		春：一名 秋：20名		12名	
2020年度 毎月 出席者数* (名)	10月(5・4・3・3) 11月(4・3・3) 12月(3)		10月(9・7・6・6) 11月(5・1・3) 12月(2)		10月(6・5・3・3) 11月(1・2・0) 12月(2)		10月(13・11) 11月(10・11・6)		(8～9)	

◆TOEIC講座◆

講座名	校地	時間	期間	講師(敬称略)	申込数	受講者数
〈試験対策講座〉 春学期	今年度の開講なし					
〈試験対策講座〉 秋学期						
〈夏季集中特訓講座〉 基礎コース						
〈夏季集中特訓講座〉 実践コース						
〈春季集中特訓講座〉 基礎コース	オンライン	9:15～ 12:25	2/24～3/2 (土日祝日を除く5日間)	中村道生	21名	16～18名
〈春季集中特訓講座〉 実践コース	オンライン	9:15～ 12:25	2/15～2/19 (5日間)	中村道生	18名	16～17名

IV. その他

《公開講演会》

- ・新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、今年度は公開講演会の開催を自粛した。

《刊行物》

- ・明治学院大学 教養教育センター附属研究所年報『SYNTHESIS 2020』3月発行

02

月例研究報告

02

ヘブライ人たちの国家 ——スピノザ聖書解釈の一側面

高木久夫

政治神学の桎梏を断った西欧初期近代の思想家たちは、何ごとも聖書にのっとって考える陋習を逃れたと思われがちである。

ところが実際の彼らは聖書を縦横に引き、当然のようにみずからの主張のよりどころとしていた。ルネッサンスから18世紀初頭にかけてのキリスト教世界の政治論は、とりわけヘブライ語聖書（旧約）本文を競ってとりあげた。そこで彼らが論拠としたのが、王国期以前の古代イスラエルの政体「ヘブライ人たちの国家」（*Respublica Hebraeorum*）をめぐる聖書のことばであった。彼らを中世までの議論と画するひとつの徴表は、聖書をヘブライ語本文で参照していることである。キリスト教徒によるヘブライ語文献研究すなわち「クリスチャン・ヘブライズム」は、宗教改革、大学での文献学の高度化、ヘブライ語印刷業の広がりを背景とするあらたな知的潮流であり、聖書のみならずタルムードをはじめとするラビ文献やマイモニデスらの哲学テキストをも視野に置く、多元論的本質をそなえていた。政治的クリスチャン・ヘブライストの主流は、近代以前の議論との比較において、総じて君主と聖職者の権限を抑制的にとらえるリベラルな立場に寄っていた。

グロティウス、ホッブズなどの著名な例外をのぞき、当然のなりゆきながら、政治的クリスチャン・ヘブライストの多くは啓蒙期には次第に顧みられなくなり、やがてその思想的意義は見失われた。しかし初期近代研究において17世紀固有の文脈への関心がひろがる近年、同時代のインター・テキストとして、彼らの議論はより広範囲に取りあげられつつある。

政治論としてもヘブライ語文献研究としても、初期近代キリスト教世界でもっと広く深い学識を示す議論のひとつが、スピノザの『神学政治論』（1670年刊）であることに強い異論はあるまい。ただし彼は1656年にアムステルダムユダヤ教団を破門されたのち、（それじたい当時では異例なことに）キリスト教に改宗せず、狭義のクリスチャン・ヘブライストに含まれない。ヘブライ語聖書をめぐるスピノザの議論は、どちらかといえば彼のユダヤ的背景とのかかわりを通して検討されてきた。『神学政治論』の複数の論点がそれまでの政治的クリスチャン・ヘブライストの論点と結びつくことはつとに知られたが、ネーデルラントを中心とする17世紀の政治的クリスチャン・ヘブライストたちの論点と『神学政治論』の議論のかかわりは、管見のかぎり全体像として整理されてはいない。このため、たとえば政治的クリスチャン・ヘブライストをめぐる今日もっとも参照されるモノグラフ、エリック・ネルソン『ヘブライ人の共和国』（2010年刊・未訳）も、個々の論点について『神学政治論』のもっともレレヴァントな主張を引いて論じるに至っていない。

この報告ではおもに、17世紀クリスチャン・ヘブライストの主要なアジェンダのうちエラストゥス主義、宗教的寛容、神権政治概念について『神学政治論』の主張を整理し、聖書の範例的権威全般を斥けたスピノザの姿勢との整合性を確認した。

第一の論点は、教会の権限を最高統治権／国家主権（*Summum imperium*）の下に位置づける「エラストゥス主義」をめぐるもので、賛否双方ともヘブライ語聖書を引いて議論していた。ドイツの神学者トマス・エラストゥス（1524–83）にちなむこの主張は本来、強制的ともなう宗教的規定

を実際に執行しうるのは世俗の権力だけであり、教会は破門などをともなう規定を主権者の同意なしに設けることはできないとする。神学者の多くはこれにはげしく反発し、古代イスラエルの祭司の権能をよりどころに教権の優越をとらえた。ヘブライストたちの主流はエラストゥス主義の側から、ことにネーデルラントでは王政復古をもくろむホマルス派聖職者を向こうにまわし、実際にヘブライ人を支配していたのは士師や王で、聖書によれば祭司の権限は限定的であったと主張した。

スピノザは『神学政治論』17章（Gebhardt版 p.209）で、大祭司が律法と神託を解釈できたのは、士師などの指導者やサンヘドゥリンの指示を受けてのことであると言明し、同19章（p.234）では大祭司の権威を引きあいに出して教会の宗教的立法権を主張する「反対者たち」の「反逆的」言い分を真っ向からしりぞけている。スピノザはここで、聖書の範例的権威に訴える相手の主張を聖書テキストをもって覆す、クリスチャン・ヘブライストの典型的論法をとっている。

第二の論点、異教徒への寛容では、ヘブライストたちの多くは聖書テキストを示し、古代イスラエルには国内の異教徒や国外のユダヤ人を裁く伝統はなく、他宗教に改宗した者への強い制裁もなかったとして、不寛容の鞭を教会の外部にふるおうとする聖職者の主張を牽制していた。

『神学政治論』14章は、神学上の意見を異にするという理由で正義を愛し誠実にふるまう者を迫害するのは、「まったくの反キリスト」であるとのべ（p.175-76）、行為にあらわれる徳が信条をめぐる対立に優越すべきであるとする普遍的な思弁から寛容をとらえた。クリスチャン・ヘブライストと異なり、スピノザはここでは聖書テキストを論じない。神への「服従」と「隣人愛」のほか聖書から一貫した教義は抽出できないとする、自身の大原則（p.168）に則したと言える。

第三の論点は、人にすぎない王の支配を神は望まないとする王権批判（サムエル記上8章）をよりどころとし、1世紀のヨセフス以来「神権統治」（Theocracy）とよばれる、君主の権限抑制の主張である。立憲主義や市民革命の先蹤ともとらえうるこの主張こそ、律法の授与からサウル即位前夜までの「ヘブライ人たちの国家」を範例とするヘブライストたちの議論の中心主題であった。

『神学政治論』は「王国」（regnum）と使い分けるかたちで、ヘブライ人たちの「国家」（Respublica ないし Imperium）に都合16箇所と言及し、うち1箇所（p.206）でそれを「神権統治」と言いかえる（名詞“Theocracy”の唯一の用例）。また形容詞形（Theocraticus）の用例2箇所（p.208、p.211）では、ヨセフス『アピオンへの反駁』第二部に見られる政体の対比をそのまま示す。スピノザは語法としては一貫してクリスチャン・ヘブライストに即した一方で、君主制を劣った政体とは断じず、ホッブズとの多くの共鳴の一方で、『リヴァイアサン』も引くサムエル記上の王権批判を論拠としない。かえって宗教と一体であった神権統治体の律法をユダヤ人の主権喪失とともに失効したローカルな一宗教法と断じ（p.230）、聖書本文の範例的権威を原理的にしりぞける。

『神学政治論』はしばしば、聖書の教説を受け入れるかのような論のはこびを見せる。検閲対策と片づけられやすいこうした箇所の多くは、むしろ政治的クリスチャン・ヘブライストたちの論争的言説へのぎりぎりの順応として説明されるべきなのである。

03

新所員研究概要

03

中国語教育文法の設計と 「やさしい中国語」

西 香織

今年度は科研費により進めている研究が2件（個人研究、共同研究）あり、ここではそのうち共同研究の研究テーマの概要を紹介する。

1. 大学第二外国語(中国語)教育を取り巻く環境

日本の大学における中国語教育の現状（特に課題）については、日本中国語学会中国語ソフトウェアカデミズム検討委員会（2002）、郭（2005、2008）、古川（2011）、西（2012）などに詳しい。ここでは以下の4点を中心に概観する。

(a) 教員の資質・養成

大学の中国語教育はその大部分を非専任教員（非常勤講師）が担っており、非中国語母語話者（日本人）が多いこと、中国語（言語学、教育学）を専門分野としない教員の割合が高いことが特徴である。中国語教育に従事するために特に資格を必要とせず研修を受ける機会も少ない。

(b) 教学目标・指導要領

全国統一の教学目标や文法項目など指導要領も定まっていないため、ほとんどが担当教員の自由裁量により授業が行われている。授業は依然として文法訳読法による教授が主流であり、コミュニケーションと謳っているものの多くは実際にはオーディオリンガルメソッドによる教授で、発音練習や決まったフレーズを練習して覚えさせるのみであり、真の意味でコミュニケーション的な活動を取り入れている授業はごく少数である。

(c) 教科書

教科書もほとんどが文法シラバスによるもので、入門・初級レベルの教科書は毎年、多くの出版社から100冊以上出版されているが、中級・上級の教科書は非常に少ない。中国語分野で大きなシェアを占める教科書は見られず、特に第二外国語課程では、大学で統一した教科書を用いず、担当教員によって異なる教科書を採用している場合も少なくない。

(d) カリキュラム

多くの大学はセメスター制を取っており、1学期あたり約15週（1コマ90～100分）の授業が行われている。第二外国語の中で中国語を履修する学生はどの大学でも多数を占める傾向にある。以前は、第二外国語の授業は必修科目で、週2コマ（うち1コマは文法・読解中心、もう1コマは会話、あるいはコミュニケーション中心）、2年間のカリキュラムが主流であったが、近年、2年間の履修期間が1年間に、週2コマの履修時間が週1コマに、必修科目だったものが選択科目になるなど、多くの大学で縮小化の傾向がみられる。

2. 「はじめに文法ありき」からの解放と中国語教育文法

昨今の学習時間の減少等による教育条件の多様化や学習者・教授者の多様化という教育環境の時代的变化に対応できないため、特に縮小化が目立つ第二外国語課程では、「初級の文法項目が多すぎる」、「文法の説明方法が難しすぎる」、「学習者・教授者の多様性に対応できない」といった問題も大きい。そこで、我々は従来の文法に代わるものとして、教育用途に特化した「中国語教育文法 (pedagogical grammar)」を設計し初級の学習負担を軽減する方途を探ることにした。

中国語教育文法は、中国語非母語話者が目標形式をできるだけ容易かつ早期に産出する手段としての文法情報を整理したもので、従来の文法が、中国語母語話者の文法知識についての規則や規則性が文法研究者の視点で分析されたものを「学ぶ」立場をとるのに対し、中国語教育文法は、中国語学習者が学習対象となる文法項目を実際に「使う」（目標形式を個別具体的な文脈や状況に位置づける）という発想の転換がある。「文法項目の軽量化による初級レベルでの学習負担軽減」と「専門知識をもたない者でも直感的に理解可能な平易な文法説明」とが実装された中国語教育文法を設計するのである。これにより、「はじめに文法事項ありき」から解放され、学習負担の軽減を図る。

3. 「中国語教育文法」は何を目指すか——「やさしい中国語」

日本語では、阪神淡路大震災を機に「やさしい日本語」が考案され、その後、多文化共生社会におけるニーズから、「共通言語としてのやさしい日本語」としても発展し、多くの自治体で「やさしい日本語」の取り組みが進められている。NHKでは「やさしい日本語」関連の番組が増え、NEWS WEB EASYというウェブサイトも立ち上げられており、NHK WORLD-JAPANでは、日本語学習のための「やさしい日本語」のウェブサイトが用意されていて、動画や音声で「やさしい日本語」の学習ができるようになっている。

一方、中国語でも、「やさしい中国語」の取り組みが始まりつつある。中国では2020年初めに新型コロナウイルスの急激な感染拡大に伴い、中国に居住する外国人向けに緊急の情報を伝達する必要が生じたことから、Plain Englishや「やさしい日本語」その他を土台にした「简明汉语 (Plain Chinese)」の開発が進められている（汲・李2020）。また、日本でも、2020年にNHKラジオ中国語講座応用編（講師：西香織）で、初めて多文化共生社会を念頭に、「やさしい中国語」の概念を前面に押し出した番組が作られている。

日本の大学の第二外国語課程における中国語教育課程が縮小化の一途を辿っているという現実の中で、「やさしい中国語」にも資する中国語教育文法の構築は必須であり、急務である。

【参考文献】

古川裕「日本“中国語”教学概況」『全球语境下的汉语教学』学林出版社、2011、107-117。
汲传波、李宇明「《疫情防控“简明汉语”》的研制及其若干思考」『世界汉语教学』3、2020、311-

322。

郭春贵「日本の大学汉语教育問題」『世界汉语教学』4、2005、91-97。

郭春贵「日本の大学二外汉语課程の教学模式探討」『中国語教育』6、2008、19-33。

日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会『日本の中国語教育—その現状と課題・2002—』好文出版、2002。

西香織「日本高校汉语教学离国际化、现代化还有多远？」『全球语境下海外高校汉语教学』学林出版社、2012、217-238。

西香織『NHKラジオ中国語ステップアップ中国語——共に生きるくらしの会話』10月号・11月号・12月号、NHK出版、2020。

野田尚史「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、2005、1-20。

鈴木慶夏「中国語教育文法設計の必要性—バックワード・デザインによる中国語学的文法からの解放—」『杉村博文教授退休記念中国語学論文集』白帝社、2017、177-196。

鈴木慶夏、岩田一成、張恒悦、西香織「ユーザー中心の中国語文法設計に向けて」『日本中国語学会第69回全国大会予稿集』2019、39-58。

使用頻度から考察する 韓国語の移動動詞の語彙的な意味

李善姫 (イ・ソニ)

動詞はそれぞれ異なる格との結びつきをもち、われわれはその結びつきから動詞の語彙的な意味を探ることができる。例えば、次のような例をみると、

- (1) 공원에 가다.
公園に行く。
- (2) 공원을 걷다.
公園を歩く。

(1) (2) の「公園」という場所名詞はそれだけでは、動詞との関係でどのような意味をもつ場所としてはたらくかよくわからない。しかし、(1) のように「공원에」の形で「가다」と結びつくと、到着する場所をあらわすし、(2) のように「공원을」の形で「걷다」と結びつくと、歩く動作が行われる場所をあらわすことになる。(2) の「걷다」は「공원에」とは結びつくことは難しい。それに対して、(1) の「가다」は「공원을」と結びつくことができるが、「공원을」は到着する場所をあらわし、(2) の「공원을」とは異なる。このような結びつきから、「가다」はある場所に移動する位置変化をあらわす動詞であり、「걷다」はある場所を通っていく動作をあらわす動詞であることがわかる。つまり各々の動詞の結合能力から動詞の語彙的な意味を明らかにすることができるのである。例えば、次の用例をみよう。

- (3) 서울에서 부산으로 갔다.
ソウルからプサンへ行った。
- (4) 서울에서 부산으로 떠났다.
ソウルからプサンへ発った。

「가다」「떠나다」は、(3) (4) のように「서울에서」という出発点をあらわす場所名詞句、「부산으로」という到着点をあらわす場所名詞句と結びつくことができ、「가다」「떠나다」は、出発の位置変化や到着の位置変化をあらわす動詞であることがわかる。

ところが、実際の言語使用においては、それぞれの動詞は出発点や到着点をあらわす名詞句との結合頻度が同じく現れるわけではなく、偏りがみられる。「가다」は到着点をあらわす名詞句との結合頻度が高く、「떠나다」は出発点をあらわす名詞句との結合頻度が高い。

「가다」「떠나다」だけではなく他の移動動詞も、実際の言語資料において出発点、到着点などの場所名詞句との結びつきに偏りがみられるのである。このような結合頻度の偏りは、移動動詞の語彙的な意味と関係があり、場所名詞句との結合頻度の実態から移動動詞の語彙的な意味の側面を探ることができるのではないかと考える。

そこで、李善姫(2021)では、‘移動主体の位置変化をあらわす’という語彙的な意味をもつ移動動詞「가다 (行く)、오다 (来る)、떠나다 (発つ／去る／離れる)、헤매다 (さまよう)、걸다 (歩く)、건너다 (渡る)、모이다 (集まる)、향하다 (向かう)」を対象に実際の言語資料における場所名詞句との結合頻度を調べ、考察を行った。

そして、同じ語彙的な意味をもつ動詞であっても、実際の場所名詞句との結合頻度において違う様子をみせ、それぞれの動詞が異なる語彙的な意味の側面をも合わせもっていることを示した。

従来の研究は、「가다」「오다」のみを研究対象にしているものが多く、実際の使用頻度から移動動詞の考察を行ったものはあまりない。そして、語彙的な意味の側面から移動動詞の体系性を示しているものもあまりない。

現在、李善姫(2021)で考察を行った研究対象以外の移動動詞の調査を行っており、今後語彙的な意味の側面から移動動詞を体系的に位置づけることができるのではないと思われる。

また、実際の言語資料における結合頻度から考察した移動動詞の語彙的な意味がアスペクト、複文、複合動詞の語構成などにどのように現れるのかを考察し、語彙的な意味と文法現象との関係を示すのが今後の研究の目指すところである。

【参考文献】

李善姫「場所名詞句との結合頻度に現れる韓国語の移動動詞の語彙的な意味の特徴」『カルチュラル』15-1、2021年3月掲載予定

宗派的多様性とその外部

池田昭光

筆者の専門である文化人類学は、異なる社会や文化の人びとと日常生活をともにしながら、人文・社会科学的テーマを、他の学問とは少し異なる切り口から考えていくところに特徴がある。筆者は大学在学中から中東地域に興味をもち、文化人類学に加えてアラビア語やイスラームについても勉強していた。大学院博士課程進学後はレバノン共和国という中東の小国に赴き、合計3年ほどの現地滞在を行いながら調査・研究を行ってきた。

レバノンという国に最初から思い入れがあったわけではない。同国は「イスラーム文化圏」のイメージの強い中東のなかでもキリスト教徒の割合がもっとも高く、また、マロン派、ギリシア正教、アルメニア・カトリックなどの様々な宗派に分かれており、宗教・文化的な多様性の高さは文化人類学的に言って興味深い。また、1970年代から15年にわたる内戦を経験するなど、現代史のうえでも大きな出来事を経験してきている。だが、同国への予備調査を通じて筆者が感じたのは「特徴のつかみづらさ」であった。

もっと特徴のはっきりした地域を選べばよかったのでは、とも思われたが、そうした地域（たとえば、エジプト、モロッコ、イエメンなど）はすでに国内外の研究者による先行研究が積み重ねられてきている。大学院生の気負いもあったのか、結果として「手垢」のついていないレバノンを選んだのである。

しかし、現地の田舎で小都市に暮らしながら本格的な調査を始めると、「特徴のつかみづらさ」に苦しめられる毎日だった。筆者の選んだ小都市は、イスラーム教徒（スンナ派）のほかにマロン派、ギリシア正教、ギリシア・カトリック、プロテスタントが混在して暮らしており、「レバノンの縮図」とも言える特徴的な都市であった（こうした場所は実はそれほど多くない）。その特徴を研究上の戦略としておおいに活用すればよかったのかもしれないが、筆者はむしろ、日々の生活のなかで、身体的・感覚的に現前する「特徴のつかみづらさ」が気になって仕方がなかった。しかし、それをどう表現したらよいのか、それすらもつかめず、鬱々としてしまうことも多かった。

優れた研究者ならば、あるきっかけを通じて研究上のブレイクスルーを経験するのかもしれないが、残念ながらそうした契機には恵まれなかった。しかし、いくつかのきっかけをもとに、日本の友人たちを前に、現地経験を表現することができた。それらのきっかけとは、ほんの些細なものである。お年寄りがシャッターを閉めたこと。古着を取りにくるよう、住民に求められたので取りに行くも、結果として古着が手に入らなかったこと。

そんなことが研究になるのかと訝しがる向きもあろう。しかし、筆者が結局のところ博士論文とその書籍版『流れをよそおう』（春風社、2018）で展開したのは、こうしたきわめて地味で些細な出来事を、前述のような、レバノンの特徴である宗教文化的多様性と結びつけて論じることであった。さらにいえば、むしろ地味で些細な出来事に見られる行動様式が、一見すると人目を引くような宗教文化的多様性を包み込んで存在しているのではないかという問題提起である。

博士論文や拙著でおこなった議論は、今から振り返れば不十分な点がいくつも目についてしまう。

しかし、ぱっとしない日常を前に悩む日々が、結果として文化を見る視点を筆者にさずけてくれたのも確かだと感じている。授業でテキストや映画を扱っても、学生たちがなぜか目をそらしてしまう一文やワンシーンに、今なら筆者は自然に目を向けることができ、そこからテキストの勘所を導き出すことも行えている（と思っている）。

教育にも応用可能な視点を養えたことが、これまでの研究成果のいちばん大きなことではなかったかと思う次第である。

これまでの研究の概要と今後の展望

健康・スポーツ科学部門 土屋陽祐

私はこれまでに運動生理学、トレーニング科学などの分野の研究を進めてきました。博士課程から現在までの研究の概要について以下に述べます。

1. 伸張性収縮運動による骨代謝への影響

骨も他の器官と同様に常に新しい組織へと生まれ変わっています。これは骨代謝とよばれています。骨代謝は古い骨を壊す（骨吸収）破骨細胞と、新しい骨を作る（骨形成）骨芽細胞によって行われ、骨量は骨形成と骨吸収のバランスが保たれることで一定に維持されます。そのため、この骨代謝のバランスが何らかの事情で崩れると骨量は減少してしまいます。一般的に骨代謝回転のバランスは、血中の骨吸収マーカーと骨形成マーカーによって評価されます。これらの骨代謝マーカーを評価することにより、今後骨密度がどのように変化するかを知ることが可能と考えられています。

骨代謝は様々なホルモンやサイトカインに影響を受けます。とりわけ女性の場合、骨代謝回転のバランスにエストロゲンが深く関与しています。また、骨格筋の成長や肥大に関与する成長ホルモン（GH）やインスリン様成長因子（IGF-1）も骨代謝に関わっていることが報告されています。しかしながら、運動後の骨代謝回転の応答や、GHとIGF-1の分泌と骨代謝との関係についての詳細は不明でした。そこで、博士課程の主要な研究テーマとして、伸張性収縮運動後の骨代謝マーカーの急性応答を検討しました。伸張性収縮は骨格筋への負荷が大きく、かつGHとIGF-1の分泌を促す運動であることが知られています。これらの検討の結果、1) 一過性の伸張性収縮運動は骨代謝回転を亢進させること⁽¹⁾、2) 高負荷の伸張性収縮運動では、GHと骨代謝マーカーには相関がなかった一方で、IGF-1の増加と骨形成マーカー、骨吸収マーカーとの間に有意な正の相関関係がみられたことを確認しました⁽²⁾（図1）。

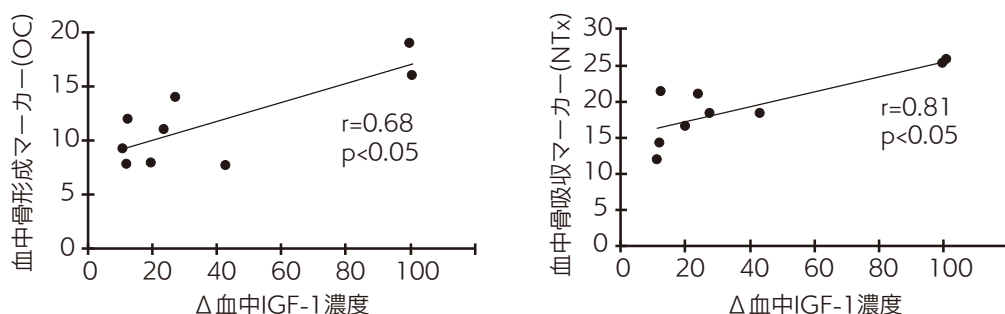


図1. 運動前から運動直後に増加した血中IGF-1濃度と骨形成マーカーであるオステオカルシン、骨吸収マーカーであるNTxとの関係（Tsuchiya et al. 2014, から改変）

これらの研究から、一過性の筋力トレーニングの様な筋運動は骨代謝を活性化させることが示され、その亢進にはIGF-1が関与していることが示唆されました。今後は、長期的な適応を明らかに

する必要がありと考えています。

2. 伸張性収縮運動による筋損傷に関する研究

私は現在骨代謝応答だけでなく、伸張性収縮運動による骨格筋への影響についての研究を中心に進めています。筋の収縮様式は、収縮時の筋の長さが変わらない状態で力を発揮する「等尺性収縮」、収縮時に筋が短縮しながら力を発揮する「短縮性収縮」、収縮方向に反して筋が伸張しながら力を発揮する「伸張性収縮」に分類されます。運動やスポーツ、あるいは筋力トレーニングでは、これら3つの収縮様式がすべて含まれます。伸張性収縮が生じる例として、荷物やダンベルをゆっくりと下ろす動作や、階段・坂道を降るように衝撃を吸収するために無意識的に筋を伸張させる場合など、スポーツや日常生活でもみられる収縮様式です。この伸張性収縮は他の様式よりも発揮張力が高く、骨格筋への負荷が大きいため、他の収縮様式に比べてより大きな筋損傷が生じます。筋損傷の特徴として、運動後に生じる一時的な筋力の低下、柔軟性の制限、遅発性筋痛の出現、筋の腫れ、筋硬度の増加などが挙げられます。ただし、これらの症状は通常3～7日間程度で消失します。伸張性収縮によってこれらの症状が引き起こされる原因に、運動単位が関係していることが推察されています。実際に、我々の研究においても伸張性収縮運動は、運動単位の動員が少なく、筋線維にかかる負担が大きいために筋損傷を引き起こす原因であることを示しました^(3, 4)。

これらの筋損傷は運動パフォーマンスの低下や不快感をもたらすことから、伸張性収縮運動後の筋損傷を抑制、緩和する方法を検討しています⁽⁵⁻⁹⁾。その中で得られた、1) サプリメント摂取による筋損傷抑制効果、2) 繰り返し効果による筋損傷抑制のメカニズムについて研究結果の一部を紹介します。

1) サプリメント摂取による筋損傷抑制効果

筋損傷を抑制する方法の一つとして、サプリメント摂取による効果が数多く報告されています。その中で、我々は魚油に含まれるエイコサペンタエン酸 (EPA) とドコサヘキサエン酸 (DHA) や、アミノ酸のロイシンの分解物質である、βヒドロキシβメチル酪酸 (HMB) の摂取効果に着目しています。その結果、1日あたりEPA600mgとDHA260mgを8週間摂取することによって、肘関節屈曲による伸張性収縮運動後に生じる筋損傷（筋力の低下、関節柔軟性の制限、遅発性筋痛）を有意に緩和することが示されました⁽⁷⁾ (図2)。

またHMBについても、1日あたり3gのHMBを2週間もしくは4週間摂取することによって、同様に肘関節屈曲による伸張性収縮運動後に生じる筋損傷（筋力の低下、関節柔軟性の制限）を緩和することが示されました⁽⁵⁾ (図3)。これらの結果から、日頃からサプリメントをうまく活用することによって、激しい運動による筋損傷の緩和が可能であると考えられます。今後も、運動による筋損傷や疲労の軽減に関する研究を広げることは重要な課題であると考えています。

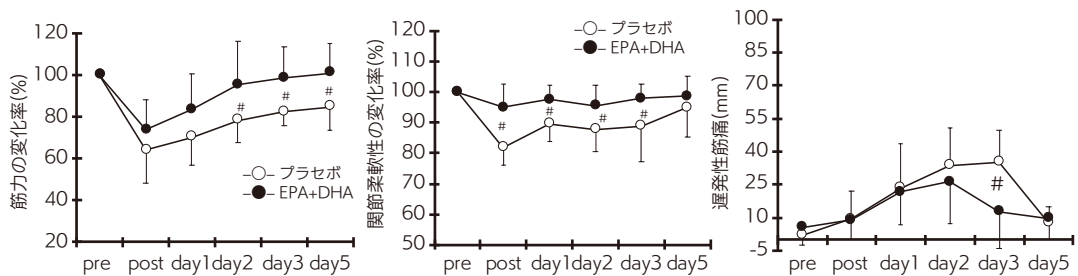


図2. EPAとDHAサプリメント摂取群とプラセボ群における伸張性収縮運動後の筋力、関節柔軟性、遅発性筋痛の変化の比較 (Tsuchiya et al. 2016 (7), から改変)

$p<0.05$, 群間の差

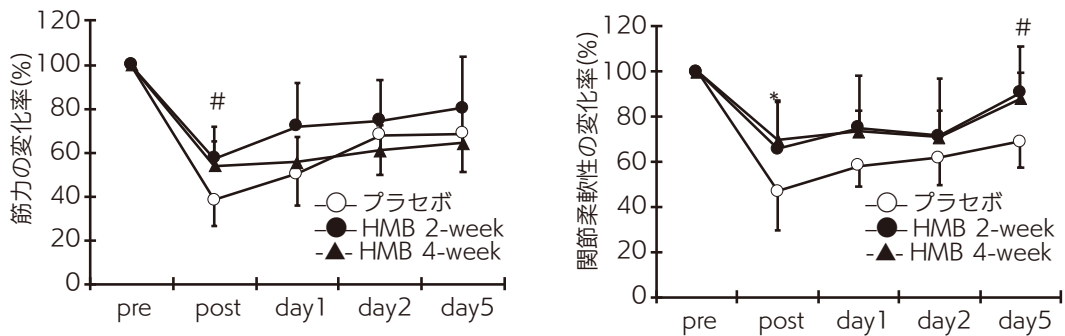


図3. HMB2週間および4週間のサプリメント摂取群とプラセボ群における伸張性収縮運動後の筋力、関節柔軟性の変化の比較 (Tsuchiya et al. 2019 (5), から改変)

$p<0.05$, プラセボ群とHMB2-week, HMB4-weekとの比較

* $p<0.05$, プラセボ群とHMB4-weekとの比較

2) 繰り返し効果による筋損傷抑制のメカニズムの解明

伸張性収縮による筋損傷は、同じ部位に繰り返し負荷した場合、初回よりも2回目の方が大幅に軽減することが明らかになっています (繰り返し効果)。この繰り返し効果は、他の介入に比べて筋損傷の抑制効果が極めて大きいことが示されています。興味深いことに、近年この繰り返し効果が運動を実施していない反対側にも生じることが観察されています (対側繰り返し効果)。我々は近年、この繰り返し効果に、運動単位が関係していることを明らかにしました⁽⁹⁾。具体的には、一度伸張性収縮運動を経験すると、2回目の運動の際には運動単位が増加するという結果を、磁気共鳴画像法 (MRI) のT2値を用いて確認しました (図4)。以上の結果から、今後は伸張性収縮による筋損傷と神経系との関係についてより深める必要があると考えています。

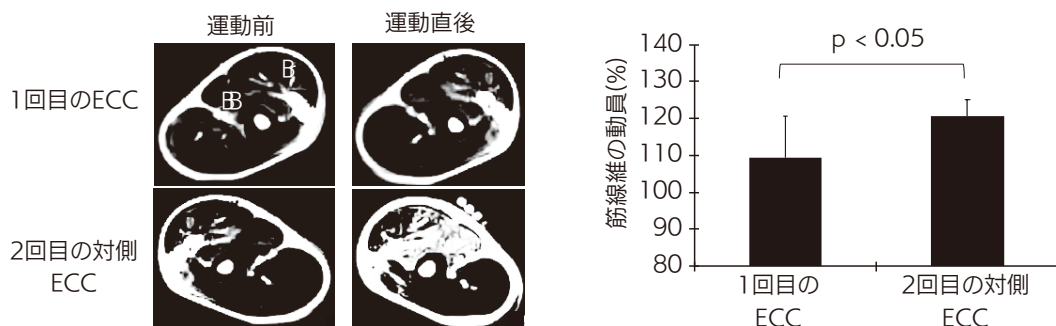


図4. 1回目の伸張性収縮 (ECC) によるMRIのT2値と、2回目の対側のECCによるMRIのT2値の比較 (筋線維の動員が多い場合、T2値は増加しMRI画像は白色化する。Tsuchiya et al., 2018(9), から改変) 片側性の伸張性収縮(ECC)を実施することによって、対側のECC中の筋線維動員が増加した(筋線維の動員はMRIのT2値を評価)

3. 今後の展望

今後は上述した伸張性収縮運動による筋損傷や神経系の適応に関する研究を深めるということに加えて、健康や競技力向上のための、より安全で効率的な運動・トレーニング方法の探求が必要であると考えています。継続的な有酸素性トレーニングや筋力トレーニングは健康寿命の延伸に極めて重要であることは多くの研究で明らかになっています。今後は、様々な健康問題に貢献できるような研究にも取り組んでいきたいと考えています。

【引用文献】

- (1) Tsuchiya Y, Sakuraba K, Ochi E. Effect of eccentric contractions of elbow flexor on bone formation and resorption markers. *J Sports Med Phys Fitness*. 2014;54 (5) :651-7.
- (2) Tsuchiya Y, Sakuraba K, Ochi E. High force eccentric exercise enhances serum tartrate-resistant acid phosphatase-5b and osteocalcin. *J Musculoskelet Neuronal Interact*. 2014;14 (1) :50-7.
- (3) Ochi E, Tsuchiya Y, Nosaka K. Differences in post-exercise T2 relaxation time changes between eccentric and concentric contractions of the elbow flexors. *Eur J Appl Physiol*. 2016;116 (11-12) :2145-54.
- (4) Tsuchiya Y, Ueda H, Ochi E. Muscular recruitment is associated with muscular function and swelling following eccentric contractions of human elbow flexors. *J Sports Med Phys Fitness*. 2019;59 (7) :1097-101.
- (5) Tsuchiya Y, Hirayama K, Ueda H, Ochi E. Two and Four Weeks of β -Hydroxy- β

- Methylbutyrate (HMB) Supplementations Reduce Muscle Damage Following Eccentric Contractions. *J Am Coll Nutr.* 2019;38 (4) :373-9.
- (6) Tsuchiya Y, Ueda H, Sugita N, Ochi E. Low Dose of β -Hydroxy- β -Methylbutyrate (HMB) Alleviates Muscle Strength Loss and Limited Joint Flexibility following Eccentric Contractions. *J Am Coll Nutr.* 2020:1-8.
- (7) Tsuchiya Y, Yanagimoto K, Nakazato K, Hayamizu K, Ochi E. Eicosapentaenoic and docosahexaenoic acids-rich fish oil supplementation attenuates strength loss and limited joint range of motion after eccentric contractions: a randomized, double-blind, placebo-controlled, parallel-group trial. *Eur J Appl Physiol.* 2016;116 (6) :1179-88.
- (8) Tsuchiya Y, Yanagimoto K, Ueda H, Ochi E. Supplementation of eicosapentaenoic acid-rich fish oil attenuates muscle stiffness after eccentric contractions of human elbow flexors. *J Int Soc Sports Nutr.* 2019;16 (1) :19.
- (9) Tsuchiya Y, Nakazato K, Ochi E. Contralateral repeated bout effect after eccentric exercise on muscular activation. *Eur J Appl Physiol.* 2018;118 (9) :1997-2005.

日本語学習者の「生涯にわたる言語学習」を支える日本語教育

山内 薫

大学時代及び大学という学習環境において、外国語という「ことば」を学ぶ意義とは何か。そして、学生の「ことば」の学びに寄り添う日本語教育／外国語教育とはどのような教育か。これらの問いを明らかにするため、筆者は、生涯教育論の概念及び「移動とことば」研究の視点を枠組みとし、「使えるあてのない外国語学習」（＝将来の就業あるいは学業において使用する可能性が低い「ことば」を学ぶこと）を行う日本語学習者の学習実態を「移動性」という観点から追究している。

1990年代以降、社会的、文化的、経済的活動のグローバル化が急速に進んでいる。グローバル化に伴い、地域内や国内から地球規模へと、人や文化が「移動」する手段が質量ともに増大し続けている。それにより、今後も人や物の物理的な「移動」や言語間の「移動」が活性化することが見込まれている。日本語教育学者及び文化人類学者である川上郁雄によると、現代が「移動」が常態とされる「移動する時代」であることを踏まえ、「国際間の双方向の移動や多地点間移動など」に研究視野が拡大されている（川上、2016）。また、社会学者のアンソニー・エリオット（A. Elliott）とジョン・アーリ（J. Urry）は、私たちが生きる現代社会を「モバイル・ライヴズ（mobile lives）」と呼び、人々は「移動の途上」にあると述べる（エリオット&アーリ、2016/2010）。現代社会に生きる外国語学習者もまた、「移動の途上」にいる。学習者は多様で豊富な移動手段を自ら選び、発展し続ける情報通信ネットワークを駆使し、それぞれに唯一の外国語学習環境をつくり出している。さらに、「移動」を通した外国語学習において、学習言語のみならず、個々が有する複数の言語を活用し、他者とのやりとりを介して複数の文化を経験している。

グローバル時代の人生を歩む外国語学習者の「ことば」の学びを探究するためには、学習者の「移動性」を踏まえた「生涯にわたる言語学習」という視点が必要となる。生涯教育論の「生涯にわたり統合された教育（lifelong integrated education）」における「統合」の考え（森、1997）から「移動」を捉え直すと、「移動」を捉えるにあたっては、物理的あるいは言語間の「移動」に留まらず、個々の人生における時間的・空間的な「移動」の意味づけ、及びそれらの生涯における統合の様相に注目する必要があることがわかる。上述したような生涯学習と言語学習は、欧州評議会の言語教育理念においても関連づけられている。欧州評議会は、2001年にEUと共同で、生活のあらゆる場面での言語学習の機会を奨励するため「欧州言語年（L'Année européenne des langues 2001）」を実施するとともに、それを記念し9月26日を「欧州言語の日（La Journée Européenne Des Langues）」として制定した。「欧州言語の日」の生涯学習に関わる記述に着目すると、「生涯にわたる言語学習」が初等・中等教育機関、あるいは高等教育機関の「内外の環境（dans et en dehors du contexte）」で行われる行為と捉えられており、学校教育機関における学習と生涯学習が言語学習という文脈で結びつけられている。さらに、「欧州言語の日」においては、言語を学ぶ目的が「職業的ニーズや移動の動機、あるいは単に楽しみと交流」といった、言語学習者の外的・内的な動機づけに置かれている（Conseil de l'Europe、2014、筆者訳）。ここから、欧州評議会が示す「生涯にわたる言語学習」において、“生涯にわたり、時間的・空間的視点から、一

人ひとりの生活やそのなかの移動性を踏まえた上で営まれる行為が重視されていることがわかる。「移動性」という概念は、「移動」が個人の時間的な推移と空間的な動きを表す概念に対して、「移動」する存在である個々人がもつ特質を「移動性」ということばで表し着目する概念である。「移動性」に着目することにより、全生涯における学びという視点から大学時代及び大学という学習環境のなかで変わり、つくられていく学びの様相を掴むことが可能となる。

筆者はこれまで、「使うあてのない外国語学習」に取り組むフランスの国立大学の在籍生／専攻した修了生・退学者を対象とする研究を行ってきた。今後は、グローバル時代の人生を歩む外国語学習者の「ことば」の学びの実態、すなわち、どのような「ことば」の学びがどのような「移動」によりつくられるのかという問いを探究する。また、「使えるあてのない外国語学習」という観点は、国外の日本語教育のみならず、国内の第二外国語教育においても共通の課題であるため、今後は相互の教育実践を共有することにより、教育のあり方を捉え直したいと考えている。さらに、大学という教育機関で「ことば」を学ぶという営みの本質を追究するために、国内外の教育現場で外国語教育に関わる実践者及び実践研究者が、多様な教育機関における多様な外国語教育の共通点や差異を対照しつつ言語教育のあり方を議論しうる場をつくっていきたい。

【参考文献】

- エリオット、A.・アーリ、J. (2016/2010)『モバイル・ライブズー「移動」が社会を変えるー』
遠藤英樹（監訳）ミネルヴァ書房（Elliott, A. & Urry, J. (2010). *Mobile Lives*. London, UK: Routledge.)
- 川上郁雄 (2016)『「移動する子ども」と日本語教育を考える』川上郁雄・三宅和子・岩崎典子 (2016)『「移動とことば」の視点から見る、個人にとっての日本語使用の意味と位置付け』2016年日本語教育国際研究大会パネル発表資料。
- 森隆夫 (1997)「理念・理論・方法」森隆夫・耳塚寛明・藤井佐知子編『生涯学習の扉ー理念・理論・方法』序章、ぎょうせい、1-8.
- 山内薫 (2019)『「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざした日本語教育ーフランスの日本語専攻学生の移動性に注目してー』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文。
- Conseil de l'Europe. (2014) *Qu'est-ce que la Journée européenne des langues ?*
(<https://edl.ecml.at/Home/Whatisit/tabid/1760/language/fr-FR/Default.aspx>) (2021年1月6日アクセス)

「立場」を探るドイツ語教育の研究

コンスタンティネスク・チェザル

ウィーン大学で日本学の勉強を修了してから、研究の分野をドイツ語教育に移し、ドイツ語教授法に重点を置いた。そのような経緯で、日本の大学でドイツ語を教える教員として、仕事の環境をより良く理解し、学生をより良くサポートするために研究の関心を次の3点に置いている。

① ドイツ語教育の立場

ドイツ語はかつて日本では、法学、哲学や医学などの分野で情報収集や研究に不可欠なツールだった。ドイツ語能力は専門の資格と似たようなハードスキルだった一方、現在は勉強や仕事にとっての必要性を失い、他の言語と人気を競っている。学習者の数が減っていくのは残念だが、学習者の減少に大学はどのように対応するのか、外国語に対する政策が問われる。

近年は諸大学の方針において、言語教育と異文化間教育とを関連づけた言語の再評価が見られるが、このことは教養教育に位置付けられた言語に相応しい発展であると考えられる。同時に、前述したようなハードスキルとしてのドイツ語から、異文化間能力（英：intercultural competence）に関わるソフトスキルとしてのドイツ語へと、役割の転換がドイツ語に対して期待されているとすれば、それに応じてカリキュラムの構成や教員に求められる資格を見直す必要があるだろう。

② 教員の立場

ドイツ語を母語とするか否かにかかわらず、ドイツ語を教える教員は本人が教わったドイツ語や教科書に載っているドイツ語を媒介して学習者に教える。広いドイツ語圏のドイツ語は複数中心地言語であり、その概念は教授法の専門分野で常識となっている一方、あまり実践に及んでいない。どこのドイツ語、だれのドイツ語を教えるべきなのか、教員は言語に対する自分の立場をどう考えているだろう。

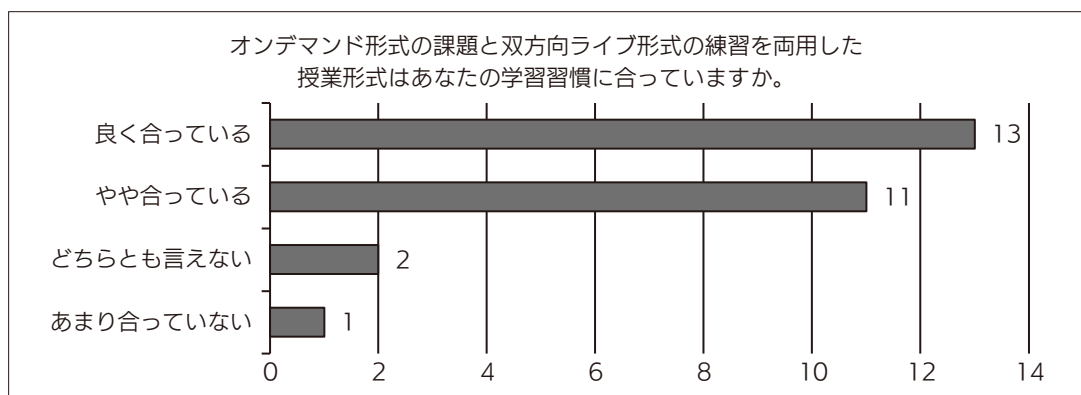
全てのドイツ語変種を配慮するのは非実用的だが、教員は（全ての言語問題に対して）最終的に正解と不正解を決めるものではなく、学生の自己学習を支援するサポート役を果たすべきだと考えている。教員を育成するプログラムの内容や国内で活動している教員の自己像がどう変わっていくのかは興味深い。

③ 学生の立場

新しい言語を学ぶ動機や目的はそれぞれである。言語を「身につけたい」という思いは、他人に近づきたい、考えや気持ちを他人と伝え合いたいという意味で、まさに教養教育に相応しいソフトスキルだ。言語は「身につけるもの」だとすると、限られた授業の時間に教員から言語知識（文法、表現）を学ぶより、その言語を継続的に日常の一部にするのが理想的である。母語話者のレベルを目指す必要はないものの、言語を自由に操ることができるまで時間がかかり、教員の指導がないときでは自己学習や自律学習の能力が求められる。

近年では教育の向上を目指す実践的研究を行ってきた。上に述べた考えとの関連で、授業時間外に学生個人の学習方法や学習に適用する戦略（学習方略）について、アンケート形式で既存の知識や教員によるサポートのニーズを調査した。研究の結果は副教材の開発に繋がった。

最近のコロナ禍において新しい授業形態や教授法がどのように学習習慣や自己学習に影響を与えるか、今年度の秋学期にドイツ語の学生にアンケートの回答を求めた。対象の学生は明治学院大学でドイツ語を勉強し始めた一年生で、アンケートでは授業形態に関する意見を聞き、学習習慣や成果を自己評価してもらった。回答結果の中から例を挙げると次の通りである。



これによると、27人の回答者のうち「良く合っている」と「やや合っている」と答えたのは合計24人で、非常に高い数値を示した。ここでは一つの例のみに言及するが、学習の進み方や学習成果に満足している声が全体的に多かった。

緊急事態から生まれた遠隔授業を不安とともに進めていった一方、「反転授業」（英：*flipped classroom*）を試すきっかけにもなった。学生は自分の時間にオンデマンド形式で新しい内容を勉強し、双方向ライブ形式の時間は少人数のグループで理解の確認や学習した内容の応用に使った。毎週、各学生の授業理解を把握することは対面授業では難しかったのに対して、オンライン授業における試行錯誤を通して発見した新しい授業の可能性を対面授業にも効率的に応用したいと考えている。

今後はより詳しい追加調査で学習習慣のあり方や、自己学習がうまくいくために期待されるサポートを聞き、私の今の常識を見直したいと思う。このような実践的研究をもってより良いドイツ語教育を目指していく。

第二言語習得のためのコミュニケーション活動における第一言語の使用について

小泉ユサ

第二言語習得論において、学習者同士が対象言語を用いて対話することは、重要な学習プロセスの一つと位置付けられている。interactionist approachの立場から見ると、対話中に何らかの言語的問題により意思疎通が滞り、その修復を図って意味の交渉（negotiation of meaning）を行うとき、学習者は原因となった問題に気づき、相手からのフィードバックを受けて自らの発話を修正し、それにより言語習得が促される。社会文化理論（sociocultural theory）から見ると、学習者が対話をしながら共に課題に取り組む中で、互いの弱い部分を支え合うcollective scaffoldingが起り、単独では達成し得なかった課題を達成できるようになる。こうした考え方は、Communicative Language TeachingやTask-Based Language Teachingなど、言語教育の現場で広く用いられているコミュニケーション主体の教授法の基盤をなすものである。

これらの教授法において、教室は対象言語を使用して学習者が対話をする場であり、そこに第一言語を介在させることは、対話の、ひいては対象言語習得の妨げになると理解されてきた。しかし近年、interactionist approach、sociocultural theory双方の立場から、こうした否定的な見方を修正する動きが出てきている。前者からは、第一言語は学習者の注意を対象言語の形式に向けさせ、意味交渉による言語的問題の解決を助け、結果として第二言語の習得を促進するという見方が示され（Storch & Aldosari, 2010; Storch & Wigglesworth, 2003; Swain & Lapkin, 2000）、後者からは、第二言語習得を目的とした課題においても、学習の契機となる対話とcollective scaffoldingの手段としては、第一言語も第二言語と同等の価値があるという見方が示されている（Alegria de la Colina & García Mayo, 2009; Anton & Dıcamilla, 1999; Cook, 2001; Storch, 2013）。

このテーマに関する先行研究でしばしば用いられる手法は、協働ライティングなど、対話をしながら第二言語の産出物を作り出す活動を学習者に行わせ、その対話の中での第一言語使用を分析するというものである。この手法による研究からは、次のようなことがわかっている。

- 第一言語は、課題を理解する、アイデアを創出する、言語の形式に関わる問題を解決する、作業の進行管理をする、相手と良好な関係を築くといった目的のために使用される（Alegria de la Colina & García Mayo, 2009; Azkarai & García Mayo, 2015; Storch & Aldosari, 2010; Swain & Lapkin, 2000）。
- collective scaffoldingは第一言語の主要な機能である。学習者は、第一言語を用いて、作業中に発生した問題に互いの意識を向けさせ、互いの知識やスキルを持ちより、協力して解決にあたる。とりわけ、複雑な構文や語彙の問題に対処する際に、第一言語に切り替える傾向がある（Anton & Dıcamilla, 1999）。
- 第一言語の使用を許された学習者ペアの対話は、そうでないペアの対話に比べ、より連続的で、学習者同士の協力がより顕著に見られ、対象言語の形式について話し合う際にメタ言語がより頻繁に使用される（Scott & de la Fuente, 2008）。

- 第一言語の使用量は、課題のタイプや学習者の習熟度により異なる (Alegria de la Colina & García Mayo, 2009; Azkarai & García Mayo, 2015; Storch & Aldosari, 2010; Swain & Lapkin, 2000)。
- 第一言語の使用量は、産出物の質と相関性がある (Swain & Lapkin, 2000)。

この研究テーマは、大多数の学習者が共通の第一言語を持ち、それが教室外の主たる意思疎通の手段であるという環境で、とりわけ重要である。日本の英語教育を例にとれば、一方で、教室は英語でのコミュニケーションを体験できる貴重な場であり、日本語の使用は極力排除すべきという議論が成り立つが、他方、文法、語彙、読解に重きが置かれ、これらを効率よく教える手段として、教員が日本語で文法を説明し、英文を日本語に訳して理解を図るスタイルの授業が広く行われている。その結果、学習者も日本語を介して語彙や構文の知識を身につける。こうしたことを踏まえると、英語によるコミュニケーションを主たる目的とする授業活動であっても、言語の形式や正確さを重視する場面では、部分的に日本語を使用させた方が、学習者の語彙や構文の知識をより効果的に運用させられる可能性がある。また、英語で表現するための準備の段階で適切に日本語を使用させれば、学習者は広範な知識を活用することができ、より内容の濃い産出物を生み出せる可能性がある。

前述した先行研究の大半は、英語圏での第二言語イマージョン教育や外国語教育、欧州の非英語圏での英語教育の場で行われたもので、そこから導き出された結論がそのまま日本の学習者にあてはまるとは言いがたい。本研究は、日本の英語教育にとって重要なこのテーマを、日本の学習者から収集したデータに基づいて探求するものである。具体的には、日本語を第一言語とする学習者ペアに協働ライティング活動に取り組ませ、作業中の日本語の使用について、以下の3点に焦点を当てて調べる。

1. 作業の諸段階（準備、ライティング、見直し・修正）における機能
2. 産出物である英作文の質（内容、言語使用の正確さ・複雑さ・流暢さ）への影響
3. 日本語使用についての学習者の意識

現行の中学校学習指導要領（平成29年告示）は、英語の指導計画の作成に当たっては、「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」と定める。しかし、それをどう実現するか、具体的な指針は示されていない。こうした中、英語によるコミュニケーション活動を妨げるのではなく、促進するような日本語使用とはどのようなものかという問いへの答が求められている。本研究は、この問いへの答を探り、日本で英語教育に携わる教員への一助となることを目指すものである。

【引用文献】

- Alegría de la Colina, A., & García Mayo, M. d. P. (2009). Oral interaction in task-based EFL learning: The use of the L1 as a cognitive tool. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, 47(3-4), 325-345. <https://doi.org/10.1515/iral.2009.014>
- Anton, M., & Dicamilla, F. J. (1999). Socio-cognitive functions of L1 collaborative interaction in the L2 classroom. *The Modern Language Journal*, 83(2), 233-247. <https://doi.org/10.1111/0026-7902.00018>
- Azkarai, A., & García Mayo, M. d. P. (2015). Task-modality and L1 use in EFL oral interaction. *Language Teaching Research*, 19(5), 550-571. <https://doi.org/10.1177/1362168814541717>
- Cook, V. (2001). Using the first language in the classroom. *The Canadian Modern Language Review*, 57(3), 402-423. <https://doi.org/10.3138/cmlr.57.3.402>
- Scott, V. M., & de la Fuente, M. J. (2008). What's the problem? L2 learners' use of the L1 during consciousness-raising, form-focused tasks. *The Modern Language Journal*, 92(1), 100-113. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4781.2008.00689.x>
- Storch, N. (2013). *Collaborative writing in L2 classrooms*. Bristol: Multilingual Matters.
- Storch, N., & Aldosari, A. (2010). Learners' use of first language (Arabic) in pair work in an EFL class. *Language Teaching Research*, 14, 355-375. <https://doi.org/10.1177/1362168810375362>
- Storch, N., & Wigglesworth, G. (2003). Is there a role for the use of the L1 in an L2 setting? *TESOL Quarterly*, 37(4), 760-770. <https://doi.org/10.2307/3588224>
- Swain, M., & Lapkin, S. (2000). Task-based second language learning: The uses of the first language. *Language Teaching Research*, 4(3), 251-274. <https://doi.org/10.1177/136216880000400304>

アスリートの身体組成と 身体パフォーマンスの関係

中谷深友紀

【研究の背景と目的】

アスリートにとって、骨格筋のサイズや体脂肪量などの身体組成は身体パフォーマンスに影響を与える要因の一つである。また、アスリートは長年の競技に特化したトレーニングを行うことから、それぞれの専門とする競技の特性を反映した身体組成や身体形状を示す。そのため、アスリートの身体組成および身体パフォーマンスを研究することは、トレーニングによる身体組成および身体パフォーマンスの適応、すなわちトレーニングの特異性を知る手掛かりになる。例えば、体操競技選手や柔道選手は上半身の骨格筋の発達、サッカー選手や陸上競技跳躍選手は下半身の骨格筋の発達が特徴的であり、それぞれの競技で発達する部位が異なる (Takai et al., *PLoS One*, 2018)。このようなアスリートの身体形状は生まれつき持っている遺伝的な要因と日々のトレーニングの影響が組み合わさってできた結果であると考えられる。

体操選手は、繰り返される高負荷の衝撃に耐えながら、上肢を用いて体重を支え、身体のバランスをコントロールすることが頻繁に要求される。すなわち、体操選手は、競技やトレーニング中に非常に激しくかつ持続的な上腕の筋活動を繰り返している。このような体操競技による上肢の筋の特異的な使用が顕著に発達している要因の一つである。

多くの競技において、ごく短時間に大きな力を発揮する能力(=パワー)が必要とされる。Stone et al. (*Phys Ther Sport.*, 2002) は、大きなパワーを発揮する能力が多くの競技の成功において重要なパフォーマンス特性であると示唆している。アスリートのパワー発揮特性を知るうえで、発揮される力と速度の関係(力-速度関係)を調べるのが先行研究で用いられており、力-速度関係とその傾きから計算されたアスリートたちの理論上の最大筋力(F_0)、最大速度(V_0)、および最大パワー(P_{max})は、彼らの競技活動およびトレーニング活動の特性を反映している (Izquierdo et al., *Eur J Appl Physiol.*, 2002)。アスリートの力-速度関係を評価することで、長期的なスポーツ特有のトレーニングに関連した筋機能の特性の分類が容易になる。しかし、体操競技について、上肢の使用が他の競技と比較しても特異的であるにもかかわらず、筋形態との関連で上肢の力-速度関係とパワー発揮の特性を検討しようとした研究はない。

これらの知見に基づくと、長期的なスポーツ特異的トレーニングの結果として、体操選手の上肢筋の力-速度関係は、特に筋サイズで正規化された力(すなわち筋の質)で、爆発的な力を発生させる能力が低いことを特徴としている可能性がある。本研究では、男子体操選手の肘屈筋の力-速度関係の特性を明らかにすることを目的とした。

【方法】

体操選手(GYM) 16名および柔道選手(JD) 22名を対象に、超音波法による上腕屈筋の筋厚、等尺性最大随意肘関節屈曲力(MVC)および動的肘関節屈曲力を測定した。6つの負荷(無負荷およびMVCの15、30、45、60、75%の負荷)に対する爆発的な動的肘関節屈曲運動時の力-速度

関係から、 F_0 、 V_0 、 P_{max} および力-速度関係の傾きを算出した。 F_0 および P_{max} は、上腕前部の筋厚から算出した筋横断面積 ($CSA = \pi \times (\text{筋厚}/2)^2$) に対する相対値 (それぞれ F_0/CSA および P_{max}/CSA) で表した。また、最大随意等尺性および動的運動時の上腕二頭筋の筋活動を記録した。

【結果】

肘屈筋のCSAおよびMVCは、GYMとJDで有意差はなかった。GYMのCSAあたりのMVCはJDよりも有意に低かった。肘関節屈曲動的運動における力と速度との関連性はすべての参加者で直線的であった (図1、GYM: $r = -0.997 \sim -0.905$ 、JD: $r = -0.998 \sim -0.840$)。 F_0 、 F_0/CSA 、 V_0 、 P_{max} 、 P_{max}/CSA 、 MVC/CSA は、GYMがJDよりも有意に低かった。また、負荷が45%MVC以下の場合には、GYMではJDに比べて筋活動量が低い傾向がみられた。

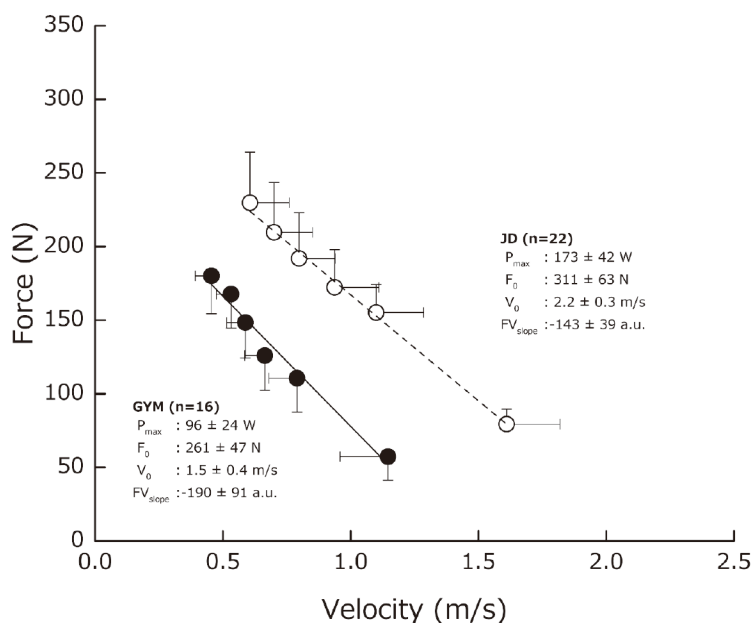


図1. 肘関節屈曲運動時の力-速度関係 (●: 体操選手、○: 柔道選手)

【結論】

柔道選手と比較して、体操選手は筋サイズに対して爆発的な肘関節屈曲力の発揮が低いことが明らかとなった。その要因として、低負荷における爆発的な肘関節屈曲運動時の主働筋の神経筋活動が低いことが考えられる。

※本研究は、PeerJに掲載予定である。

04

ランゲージラウンジ
活動報告

04

2020年度ランゲージラウンジ活動報告

教養教育センター ランゲージラウンジ運営委員会

1. 総括

2008年に始まったランゲージラウンジ活動は、まず語学検定試験用の問題等をそろえて学生たちが自律的に学習できる環境をつくることから始まった。現在では、英語とスペイン語はILSSP (Independent Language Study Support Program) を開設し、学習者自らが具体的な目標を設定して、そのゴールに向かって定期的にチューターと面談しながら（英語）、あるいはオンライン学習を用いて（スペイン語）、自律学習実践ができるように支援を行っている。また、それ以外に、言語ごとに曜日・時限を決めて、母語話者との会話実践の場を提供したり、日頃の学習のサポートを行ったりしている。

今年度は新型コロナウイルスの流行により、緊急事態宣言が出るなどしたため、変則的な活動となり、臨機応変な対応が求められた。ほぼ全面的にオンライン授業になる中で、本活動もオンラインによる実施となったが、活動に携わる教員にとっても語学学習のあり方を見直す良い機会となった。

次年度についても、引き続き母語話者との交流の機会を増やし、言語がコミュニケーションの道具であることを実感できるような場を増やすことを目標に、多様な外国語学習の支援活動を行っていきたい。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：鈴木陽子

英語部門では、昨年度に引き続き、二種類の自律学習支援プログラムを実施した。一つは、一学期間にわたって自律学習を支援するIndependent Language Study Support Program (ILSSP)、もう一つは、一回のセッションから参加可能なEnglish Clinicである。今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、二つのプログラムは春・秋学期共にWeb会議ツール（Zoom）を用いてオンラインにて実施した。

ILSSPは、本学非常勤講師の山森由美子氏および坂井誠氏を担当者とし、月曜日（11：00－15：30）、水曜日（11：00－12：55）、木曜日（13：00－15：30）に実施した。各学生が設定した目標に沿って教材や学習方法を提案し、ポートフォリオ（学習記録）を活用して、自律的に学習計画や目標が立てられるよう助言を行った。春学期には受け入れ可能な人数を大幅に超える申し込みがあったが、個別指導という性質から、希望する学生全員にプログラムを提供することは叶わなかった。そのため、参加申込書に記入された英語学習の目標を勘案して選抜を行った。各学期の参加者数の詳細は表1の通りである。

表1 ILSSPの実績

	LE	LF	LA	EE	EB	EG	SG	SW	JU	JC	JP	JG	KS	KC	PS	PE	計
春	2	0	0	1	1	1	0	1	0	1	1	1	2	1	3	1	16
秋	1	0	4	1	1	2	1	0	3	0	3	0	1	1	0	2	20

English Clinicは、ILSSPに参加することができなかった学生や英語学習に関するさまざまな質問や悩みを抱える学生に向けたプログラムである。本学非常勤講師のTom Webb氏および田辺玲子氏を担当者とし、春・秋学期共に火曜日と金曜日の昼休みに実施した。各学生が抱える相談内容に応じて、文法や語彙、発音に関する質問に答え、英語の学習方法や留学関係書類の作成について助言を行った。また、英会話やプレゼンテーションの練習ができる機会を提供した。オンライン化に即座に対応するため、春学期は一日の提供数を減らして一回のセッションを40分としたが、秋学期は昨年度と同じく20分で実施した。今年度（12月20日時点）のセッションの予約率は表2の通りである。

表2 English Clinicの実績

	春学期	秋学期	全体
提供数	22	50	72
予約数	22	43	65
予約率	100.0	86.0	90.3

予約率は春・秋学期共に高く維持されており、プログラムに対する学生の関心の高さがうかがえる。また、オンラインになったことで、キャンパスを問わずプログラムを提供することが可能になり、より広いニーズに応えることができた。来年度以降もプログラムの周知に力を入れ、多くの学生に利用してもらえることを期待する。

2.2 ドイツ語部門：コンスタンティネスク チェザル

2020年度ランゲージ・ラウンジ（ドイツ語）はコロナ禍の影響により春学期は開催されず、秋学期から「ドイツ語 de ランチ」と題して、森本康裕氏（本学非常勤講師）が遠隔形式によって行なった。授業時間の変更や昼休み時間の短縮のため、開催日時は毎週月曜と金曜の週二回、それぞれ昼休みの30分間（13：00～13：30）の実施となった。当初はTeamsを利用したリアルタイム双方向型にて講座を実施したが、途中から月曜にオンデマンド型、金曜に双方向型へという方式に切り替え、流動的な参加が可能となるよう形式に変更した。参加者はドイツ語初級を履修する1年生および中級を履修する2年生の学生だったが、時にはドイツ語未履修者が参加することもあり、本講座はドイツ語だけでなく、ドイツ語圏の文化に関するさまざまな情報を提供する場となった。

教材としては主にYouTubeにアップロードされているドイツ語圏のニュースやアニメーション、あるいはドイツ語学習教材や映像資料を利用し、ドイツ語リスニングや基礎文法項目の解説、重要なフレーズや単語の確認、すでに授業内で学んだ文法事項の復習、典型的なドイツ語の言い回しなどを学習するとともに、現代のドイツの時事的な問題の解説を行なった。

2.3 スペイン語部門：大森洋子

スペイン語では、昨年に引き続きオンラインコースを行なうとともに、Francisco GARZÓN先生を講師に、Tertuliaと名付けて、会話実践の時間も設定した。

自律的な学習をより効果的に行えるオンラインコース、セルバンテス文化センターが開設しているAVE globalは、今年度も利用した。

昨年と比較すると、希望者は多かった。それぞれがDELE受験や将来の留学、さらには一定期間の現地での語学研修を経て、そこで得たスキルの維持等を考えての申し込みが多かった。スカイプでの授業がなくなったことで受講を断念した学生もいたが、最終的に40名弱の学生が一年にわたって受講している。問題は、定期的なチェックをしないと学生が自律的に学習できているかが把握できないこと、また時に学習を促したとしても、一方的な呼びかけであるためなかなか実情を掴めない点である。今後はこの問題の解消のために工夫していく必要がある。

一方、会話スペースは、コロナ禍の影響で春学期は中止とし、秋学期はTeamsを使用して行ったが、昼休みが短縮されて、35分程度のセッションとなった。オンラインであるために、個人のレベルの違いなどで意思疎通が困難だったような印象を受けた。しかしながら、時期にあったスペインのテーマを取り上げて、映像等を使ってスペインについての情報を共有することで、スペイン語圏への興味をかき立て、学習のモチベーションアップにはつながったと言えよう。次年度もオンラインでのスタートとなることも予想されるために、オンラインでのインタラクティブ活動について担当者とも研究を続けて、より活発な活動になるように努力しようと考えている。

Teamsでの開催実現には、教養教育センターの担当者にいろいろとお世話になった。改めて感謝の意を表したい。

2.4 中国語部門：張宏波

2020年度中国語部門「中文会話倶楽部」の活動は、昨年までに引き続いて中国人留学生がスタッフとなって担当した。ただし、コロナウィルスへの対応として、授業と同様にオンラインでの開催となった。春学期と秋学期にそれぞれ12回と26回開催された。

春学期は、毎週木曜日の昼休みに（約60分）実施した。参加者数は各回を通して多く（数名だけの回もあったが）、20名を越えるほどの盛況回も見られた。オンライン授業となって学生同士や教員に直接触れることができないため、授業以外にも触れ合える機会を求めている学生が少なかった。参加人数が多いとやはりそれ自体で明るく活発な雰囲気生まれ、楽しみながら学ぶという目的に適う場になりやすいことは、オンライン版の会話倶楽部でも同様だった。オンラインでも留学生主導のスタイルは親しみやすい雰囲気を作る上で重要だった。

また、Zoom上で少人数のグループに分かれて会話する機能は、中上級レベルの会話練習をした、中国人留学生と話したい、発音のチェックをしたいなど、明確な目的を持って参加している学

生には、大変好評だった。対面での開催以上に効果を感じた学生もいた。逆に、希望する相手とグループが組めない場合は不満となった。きめ細かい対応が求められる。

技術面では、オンライン開催が初めてであったことから種々の困難を経験したのも事実である。Zoomの法人契約が成立するまでは、無料版の「40分の壁」で一度中断することになり、それでもなくとも短い昼休みの開催の支障となったのは痛かった。また、Zoomの操作に担当教員や留学生が慣れていないこと、参加学生もオンライン・スタイルに不慣れであること、昨年度までの対面での会話倶楽部を経験している学生にはオンライン開催との落差への戸惑いなどもあり、試行錯誤が続いた。ただ、授業を含めたオンラインでの開催は当面継続される可能性があり、またオンライン開催に一定の効果を確認できれば、普段でもオンラインなら参加できる学生がアクセスできるなど、新しい展望が開きうるため、このスタイルの可能性を膨らませたいという思いが多くの参加者から感じられた。この明るい兆しを大事にしたい。

秋学期（ビデオ会議ソフトウェアはTeamsに変更）は授業時間帯の変更があったため昼休みの時間が短くなり、30分だけの開催となった。その代わり、月曜と木曜の週2回の実施とした。それでも、前後に授業が入っている学生は、食事の時間がほとんど取れなくなってしまう。実際に、秋学期の参加者は一転して少なく、当初は10名程度だったが、次第に数名程度に減っていった。30分という時間の短さが参加者減少の小さくない要因といえる。オンライン特有の開始時のもたつきなどがあると、実質20分あまりとなり、参加者にとっては中途半端で得られるものが少ない場になってしまったのではないかと考えている。また、オンライン授業になって授業で課される課題が増え、学生に時間的余裕がなくなっているという状況も何度も耳にした。

そのため、2021年度は開催形式や時間帯の設定を工夫する必要があると考えている。担当留学生たちと今年度の経験・反省を踏まえながら、検討を重ねていきたい。

今後の課題としては、例年行っている「手作り餃子体験」などの国際交流イベントも、こうした状況では開催できず、残念だった。オンラインで代替の取り組みができないか、参加者の要望を聞きながら検討していくことも、今後の課題だと考えている。体験や実践の場を通して中国語学習意欲が刺激される学生がいるのも確かだからである。今後も様々な学びへの通路を用意するよう心掛けていきたい。

もう一つは、春学期にスタッフではない中国人留学生が何人か参加してくれていたが、うまく関わってもらうことができなかったことである。彼らは、日本の学生と中国語を通じて交流したり、日本人学習者との交流を通じて母語について理解を深めたいと考えて参加していた。ただ、オンライン活動のなかでうまくその積極性を活かすことができず、やがて顔を見せなくなったのはとても残念だった。多様な参加者のニーズに応え、既存の取り組みを有機的に結び付けたり、発展させていける準備をしておくことを今後の課題としたい。

2.5 韓国語部門：李善姫

2020年度 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」は、オンライン同時双方向型(Zoom)の形態で、高槿旭先生により毎週水曜日(12:55~13:55)実施された。

また、秋学期には、韓国人留学生がアシスタントになり、「New韓国語ビタミン」を毎週水曜日(12:55~13:35)実施した。

各講座の実施状況は次のとおりである。

1. 韓国語ランゲージラウンジ「韓国語ビタミン」

参加人数は、春学期は15~32人、秋学期は2~32人が参加し、例年より多くの学生が参加した。担当講師の高槿旭先生から以下のようなことが伝えられた：話す能力の向上を最大の目標とした。具体的な内容と、成果は次のごとくであった。

●学習内容

春学期は主に韓国語圏をめぐる様々な動画を視聴して、日本語圏と韓国語圏の文化の相違点について、話す練習を行った。

秋学期は性格、料理、好きな作品といった身近なテーマを中心に、韓国語で語り合った。

●学生の反応と成果

オンライン授業の導入で、①参加者の増加、②WEB教材の利用、③レベルに応じたグループ練習ができて、良かったと思う。

学生の意見としては、「韓国語でたくさん話せるのが嬉しい」「少人数で話しやすい」「様々な動画を見て、韓国により興味を持てた」という意見が多かった。また、「韓国や韓国語に興味を持っている仲間と交流ができて良かった」という意見もあった。

総括して、ランゲージラウンジに参加することにより、話す能力の向上、韓国語圏の文化や社会をより理解することができ、学習モチベーションアップにつながったと言える。

2. 韓国語ランゲージラウンジ「New韓国語ビタミン」

秋学期にオンライン同時双方向型(Zoom)の形態で韓国人留学生3名がアシスタントになり、毎週水曜日の昼休みにランゲージラウンジを実施した(6回実施)。

参加人数は4~9人で、主に中・上級レベルの学生が参加した。

趣味・文化・ドラマなど、毎回違うテーマで留学生と語り合う時間を設けた。

学生からは、「韓国人留学生たちと話すことができてとてもうれしい」「少人数なので話すチャンスが多くてよかった」「さらに韓国語ができるようになりたい」という意見があり、韓国語ランゲージラウンジが、学生の学習意欲向上へと導くことができたのではないかと考えられる。

2.6 フランス語部門：塩谷祐人

2020年度ランゲージラウンジ（フランス語部門）Pause Caféは、昨年度に引き続き、勝山絵深氏（本学非常勤講師）が行った。新型コロナウイルスの影響により春学期は開催を断念したが、秋学期はオンラインで開催し、54名の登録があった。そのため当初は月曜のみの開催であったが、10月からは月曜日をオンデマンドによるコンテンツの配信、木曜日を学生の質問への回答や小テストやクイズなどに対応するという週に2回の開催とした。

学科を越えてフランス語を学ぶ学生たちが集まり、フランス語の疑問を解決したり、実践的なフランス語を習い覚えたりするだけでなく、フランスの情報が得られるカフェのような場所を設けるために立ち上げたが、オンラインでもその目的に適ったラウンジの運営を心掛けた。例えばコンテンツでは、フランス語の文化を主題としたコラムに加えて、フランス語の勉強のコツを伝えたりフランス語の解説を行ったりした。またコンテンツだけでなくZoomを利用した交流会も行った。今年度は初めての試みだったため試行錯誤しながらの運営であったが、参加した学生の反応から判断すると、今後はZoomによる交流会の回数を増やしてもいいのではないかなと思えた。

学生からは留学に関してや、検定試験に関して、あるいは勉強方法に関してなど様々な質問が寄せられ、それらはLMS上の個別指導や掲示板を利用して個別に対応ができた。

実際の参加人数は、学生の授業での負担が大きくなったこともあってか、回が進むにつれて減少する傾向にあった。しかし、それでも20名近くの学生がコンテンツを閲覧し、12月の少ない時でも10名以上の閲覧があった。木曜日の参加人数は回によってばらつきがあるが、参加者ゼロの回は12月15日現在では一度もなく、2名～11名の参加があった。

オンラインによるオンデマンド形式のランゲージ・ラウンジは初の試みであったが、白金キャンパスと横浜キャンパスのどちらの学生も参加できるメリットがあるだけでなく、内容に関しても参加していた学生からは肯定的な意見が寄せられた。一方で回が進むにつれて参加人数が減少していくことや、上級レベルの学生への対応が十分にできなかったことが今後の課題となる。全学部学科、全学年が参加していることもあり、今後は幅広いレベルに対応するために文法的な内容やドリルを充実させたり、コンテンツをレベルごとに分けて配信したりするよう工夫することも考えている。

05

語学検定講座報告

05

2020年度語学検定講座報告

中国語部門：洪潔清

2020年秋学期の「中国語資格試験対策講座」は従来の講座内容をオンライン形式で実施した。以下は担当教員が提供した情報に基づいてまとめた実施報告である。

1. 実施方法について

開講された三つの講座はいずれもmanabaとZoomを併用して実施された。Zoomでは授業の進行使用し、manabaでは主に資料配布と質問を受け付けた。例としては、manabaのコンテンツに文法要点を載せたり、manabaのドリル形式を使用し過去問を提示したり、manabaのコメント機能を利用し質問を随時受け付ける方法などが挙げられる。一部の講座では、従来の対面授業で配布していたリスニングに使うキーワードリストをQuizletというツールを利用し工夫をしていた。

また、いずれの講座においても受講者の苦手分野はリスニングと見られるため、過去問の練習を通してリスニング強化に力を注いだ。例えば、受講者にはスクリプトなしとありの二つのパターンでリスニング問題を取り組ませた。両方取り組むことで生徒に音声を聞く機会を増やすとともに、スクリプトなしでは聞き取れない語句を受講者自身に認識させる効果が期待できる。

2. 受講者について

基本的に二年生以上の学生を受講対象として募集していたが、中には、中国語の歌やドラマが好き、または中国人の友達がいるなど、普段の生活に中国語と接する機会がある一年生も少なからず存在していた。彼らは講座を通して文法の問題点を解決していけば、中検4級・HSK3級をクリアすることが可能と見られる。

一方、受講者の参加意図とモチベーションは様々であり、講座参加者数は漸減した傾向が見られたものの、最終回まで継続した受講者からは肯定的な評価が得られた。

3. 今後の課題について

現行では「中国語資格試験対策講座」に中検とHSKを一括りで受講者を募集しているが、実際講座を実施する際はどちらか一方の試験対策に絞って授業を進めている。また受講者がどちらに受験を希望するかは年度によって異なる。文法事項については中検もHSKもほぼ同じであるが、リスニングの出題形式が異なる。大多数の受講者にとって難関であるリスニングの練習時間をより増やすためには、受講募集時中検とHSKを分けたほうが効率的だとの意見が寄せられている。

ドイツ語部門：コンスタンティネスク チェザル

2020年度春学期のドイツ語検定試験対策講座はコロナ禍の影響により、6月の検定試験が中止になったこともあって開催できなかった。秋学期は4級対策講座（横浜）を水曜5限に佐藤修司氏

(本学非常勤講師)の担当で、3級対策講座(白金)を火曜5限に小山田豊氏(本学非常勤講師)の担当でオンラインにより開催した(それぞれ全8回)。

4級対策講座では、当初Zoomを使用していたリアルタイム型の授業を計画していたものの、学生が参加できたのは最初の2回のみだったため、3回目以降は教材資料をmanabaにアップロードし、適宜学生が自修した上で、質問等がある場合は同じくmanabaを通して受け付けるオンデマンド式(教材提示型)の授業を実施した。

3級対策講座はオンデマンド式により次の内容で実施した。過去の出題内容をふまえた解説、自学自習に適した参考書や問題集、単語集の紹介、過去の問題3年分をmanabaにアップロードして解答、受講者にアンケートを取り、未習事項や苦手意識のある項目を確認、解説資料と練習問題を作成し、毎回の授業コンテンツとして音声付きでアップロード、まとめの自習用プリントを作って配布。なお、毎回、出席確認のかわりに単語の小テストをmanabaで実施、最終回は聞き取り問題を含む模擬試験を行ない、本番直前のまとめとした。

スペイン語部門：大森洋子

スペイン語DELE準備講座は、春学期は中止、夏休みの文法編、会話編からのスタートとなった。講師の先生との連絡をとりながら、こちらはzoomを使って行った。

1. 募集に際して

オンライン講座となったため、まず学習歴があることを条件に募集を行った。教室での講座の場合には、学生の学習状況を細かく観察できるために、意欲のある学生については学習を始めたばかりの学生も対象にしたが、今回は、1年以上の学習歴をもつ学習者に限った。応募者は、具体的に11月、または次年度の5月のDELEの試験を受けようというような意欲的な学習者が多く、DELE試験についての知名度が上がってきたことを実感した。夏休みの授業では、5日のコースであったため、また予想したよりも難易度が高かったと感じた学生が多かったようで、最後は2、3人の出席になってしまったが、それでも目的をもった学生が熱心に授業に臨んでいたという報告を受けている。

秋学期についても、オンラインで講座を行ったため、普段は横浜開講のために白金で授業を受けている学生の受講が難しかったが、今回はその問題が解消し、10名程度の学生の申し込みがあった。さらに、水曜日でいろいろなイベントもある中で、最後まで受講を続けた学生が多かった。(11月のDELE試験後も講座を持つことができたので、試験後の反省、また次回試験に向けての対策、アドバイスなどに利用された。)

2. 講座内容について

大きな問題は、教材の配布等であった。Manabaを利用して行ったが、Manabaに載せる教材が

不鮮明で学習しにくいなどの問題があった。また、講師からはオンラインであるために、学習者の手元が見えない、どこでつまづいているのかわからない、時間配分が難しいなどの問題が報告された。一方で、Manaba（LMS）でさまざまな教材を共有することができるために、講座以外での学習も容易にできた点はよかった点で、さまざまな学校の活動のため欠席したとしても、授業の様子等が把握できそれが学習を続ける要因になったと思われる。学生が、初習外国語授業を受けるだけでなく、それを機会にもう一つDELEの試験で資格をという意欲を持たせる上では、とても有意義な講座となっていると言える。

3. 総括

春学期は、教師側も急にオンラインとなった授業に専念することを第1として、中止をしたが、秋学期はそこでのノウハウを生かして、スムーズにオンラインでの授業ができたと思われる。

今後は、教材についてもより良い利用法を考えて、春学期のオンライン講座ではそれを活かしていきたい。また、学習者のスペイン語を学ぶモチベーションの一つとしてDELE試験受験という方向があってもいいだろう。スペイン語教育、外国語教育のレベルアップのために寄与していければいいと考えている。

本講座の実施にあたっては、LMSでのコース設定、アカウント作成など教養教育センタースタッフ、教務部スタッフ、情報センタースタッフにさまざまな協力をいただいた。改めて謝意を表したい。

韓国語部門：李善姫

2020年度秋学期に韓国語の語学検定講座は、オンライン同時双方向型(Zoom)の形態で、木曜日4時限（TOPIK II）、金曜日5時限（TOPIK I）に実施された。

金曜日5時限のTOPIK I クラスは、参加する学生が多く、4回目の講座より2クラスに増設され、実施された。担当講師、実施期間、参加人数などは次のとおりである。

クラス	担当講師	実施曜日・時限	実施期間	参加人数
TOPIK I (A)	朴庚卿	金曜日5時限	10月2日～11月20日	7～25人
TOPIK I (B)	金南听	金曜日5時限	10月23日～11月20日	6～10人
TOPIK II	崔静仁	木曜日4時限	10月1日～11月19日	2～11人

担当講師の朴庚卿先生、金南听先生、崔静仁先生より次のようなことが伝えられた。

●学習内容

TOPIK I クラス、TOPIK II クラス共に、過去問の「読解」「聞き取り」の問題を解きながら、質問に回答した。授業以外の時間の質問については、manabaを利用し、学生の質問に回答した。毎

回テストを行うことで、学習到達度を確認した。

TOPIK II クラスはmanabaのレポート機能を使い、「作文」の添削指導を行った。

●学生の反応と成果

学生からは、「伝統的な行事などに関する難しい文章については、写真・動画など視聴覚資料を見せてくれるので、理解が深まった」「TOPIK I のクラスが4回目からクラスが2つに分かれ少人数で勉強できたので、より効率が上がった」「TOPIKの合格という同じ目標を持つ仲間がいるので、積極的に臨むことができた」という意見があった。

全体的にオンラインで講座が実施されたことで、より参加しやすい環境になり、対面より多くの学生が意欲的に参加できたと思われる。

フランス語部門：塩谷祐人

2020年度の検定対策フランス語講座は、新型コロナウイルスの影響により春学期の開講は断念せざるを得なかった。また検定試験自体も行われなかった。

しかしながら、秋学期はオンラインで講座を開講することができた。昨年度と同様、対象は実用フランス語検定3級を受験する学生を想定し、本学非常勤講師の檜垣嗣子先生が担当してくださった。結果的には、オンラインによる開講は利点も多く、今後は仮に対面が可能になっても、オンライン講座の継続を考えてもいいのではないかと思えるものであった。

オンラインによる大きな利点は、白金キャンパスと横浜キャンパスの両方の学生が利用できることにある。予定の定員を上回る20名の学生からのエントリーがあった。ただし、実際の初回の参加人数は13名であり、その後は10名程度にとどまった。また最終回は検定試験後に行われ、ふりかえりや今後の学習について考える機会としたため、参加者は6名であった。とはいえ、一人ひとりの学生への対応を考えた場合、20名のエントリーで参加者が10名前後というのは、適切な人数であったとも思える。

内容に関しても、オンラインになったことで新たなやり方が可能になった。LMSを通じて事前に参加者に課題を配布し、金曜日の5限にZoomを使用してライブ形式でその課題の解説や添削を行った。講座後に行ったアンケートでも、内容に満足したという回答ばかりが寄せられ、今後もオンラインを活用しながら講座を開講する可能性を十分に感じる事ができるものとなっていた。対面のほうが質問しやすいという意見もあったが、同学生からは、それでもZoomで質問することができたのでありがたかったという肯定的な意見も聞くことができた。

一方、開講時期と回数には再考が必要であると思われる。今回は全5回で行い、5回目は試験後のふりかえりとしたが、参加者からの声や試験の願書提出日が講座開講より前であることを考慮すれば、もう少し開始時期を前倒しし、回数を増やすことを検討してもいいだろう。ただし、これは授業開始日などの学暦や検定試験のスケジュールによって大きく制限されるため、その中で最も適

切な時期を選ぶことが必要となる。また3級を対象としているためか、参加者が国際学科やフランス文学科に集中してしまうことやエントリーしたものの初回から不参加の学生が多くいることも、解決すべき問題であると考え。初習外国語としてフランス語を学んでいる学生を対象にするのであれば、ひとつレベルを下げた4級対策講座のクラス増設も視野に入れても良いのではないかと考えられた。

研究
所概
要

月
例
研
究
報
告

新
所
員
研
究
概
要

ラン
ゲ
ー
ジ
ラ
ウ
ン
ジ
活
動
報
告

語
学
検
定
講
座
報
告

研
究
プ
ロ
ジ
ェ
ク
ト

研
究
業
績

06

研究プロジェクト

06

2020年度の研究プロジェクトについて

教養教育センター附属研究所長 嶋田彩司

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う社会情勢の変化にともない、研究活動にもさまざまな制約が加えられることとなり、研究プロジェクトの継続についても再考を余儀なくされる事態となった。教養教育センター附属研究所は、2020年7月19日付で以下のような提案をおこない、所員の同意を得た。

教養教育センター附属研究所の今後の活動について(案)

【骨子】

- ・新型コロナウイルスへの感染拡大がつづく現況に鑑みて、今（2020）年度（秋学期以降）の研究プロジェクトに関しては、所員の健康確保を最優先し、予定される諸活動を中止ないし大幅に縮小して実施することを可とする
- ・結果として今年度実施し得なかった活動については、次年度に持ち越すことができるものとし、そのために必要な予算措置をおこなう

【個別】

1. 今年度の研究プロジェクトについて

- 1) 代表者には、中間報告を8月17日（月）迄に提出願いたい。A4用紙、書式自由。活動実績（ない場合はその旨）と秋学期の予定（執行予算額の見通しを含む）を、教養教育センター（担当は広瀬、土佐両氏）宛メールに添付のこと。なお、年度末の報告については別途検討のうえ、通知する
- 2) 現下の状況では研究計画の完全な遂行が困難であることも考えられる。その場合には、計画を次（2021）年度へ持ち越し、継続することも認める。継続を希望する場合には、8月17日（月）迄に教学補佐にその旨をメール連絡願いたい
- 3) 上記2) について、次年度継続する場合には、各プロジェクトの未執行予算額の80%を上限として次年度に繰り越すことができるものとする

2. 次年度の研究プロジェクトについて

- 1) 上記1)の継続案件（便宜上「研究プロジェクトA」とする）については、修正版「予算計画書」（必須）と「研究プロジェクト計画申請書」（変更ある場合のみ）を9月25日（金）迄に提出していただきたい
- 2) 上記とは別に新規のプロジェクトを募集する（「研究プロジェクトB」）。助教、助手の職位にある所員を申請者とし、助手については教授、准教授、専任講師の職位にある所員のすくなくとも1名を共同研究メンバーに含むものとする（助教については不要）。予算については、次年度は今年度研究プロジェクト予算枠のうち、研究プロジェクトAを差し引いた残余の枠内におさめるものとするため、現時点で採択予定件数と金額は未定である。具体的な募集要領等が定まり次第、当人に知らせる

- 3) なお、研究プロジェクトBについて、研究プロジェクトAのメンバーが重複して申請者に加わることはできないものとする
- 4) 研究プロジェクトA、Bともに、付属研執行部の事前審査を経て、秋季所員会議（総会）の承認を得るものとする
- 5) 研究プロジェクトBについて、次年度は試行的実施と位置づける。2022年度以降に、研究プロジェクトA、Bともに見直しをおこなうものとし、今後そのための議論をおこなう予定である

〈プロジェクトAについて〉 今年度の研究プロジェクト名とメンバーは下記の通りである。上記の方針に沿って各代表者にプロジェクトの進捗状況と次年度に向けての要望を聴取した。その結果、

- ・今年度の活動については大幅な縮小を余儀なくされており、次年度への継続を希望するもの……①,②,③,⑥
- ・今年度と同様、次年度においても活動が困難で、継続を希望しないもの……⑤
- ・今年度の活動に一定の成果が見込まれるため、今年度で終了とするもの……④

となり、これを2020年10月21日開催の秋季所員会議において承認した。

①	ひとびとの歴史を表現する：首都圏開発と市民活動の現代史的探究
	*猪瀬浩平、長谷部美佳、植木献、可部州彦、荻村哲朗
②	神山町旧村役場文書から見た人の移動に関する研究
	*吉岡拓、鄭栄桓
③	林京子と上海 ―共生／加害の記憶―
	*篠崎美生子、洪潔清、渡辺祐子
④	Revisiting Extensive Reading in the Digital Age: An Exploratory mixed Methods Study on Japanese University Students' Affective Responses
	*Jesse Elam, Dax Thomas, Dawn Grimes-MacLellan
⑤	大学生の体的特徴－運動選手と非運動選手の比較－
	*杉崎範英、森田恭光、諏訪間恵美
⑥	筋と腱における「硬さ」の評価～超音波剪断波エラストグラフィを用いた測定とその妥当性～
	*黒川貞生、榎本翔太、亀ヶ谷純一、中谷深友紀、土屋陽祐

なお、今年度をもって終了する④の活動報告は次項に掲載のとおりである。

〈プロジェクトBについて〉 プロジェクトBは、比較的若い研究者に対する研究支援を趣旨とする。公募の結果、下記の1件について上記所員会議において承認を得た。

①	Extensive Reading vs. Audio-Assisted Extensive Reading: A Comparison of Performance and Motivation
	Dax Thomas

2022年度以降の実施方針については、次年度前半に研究所執行部で協議し、所員に提案をおこなう予定である。

Revisiting Extensive Reading in the Digital Age: An Exploratory Mixed Methods Study on Japanese University Students' Affective Responses

Jesse Elam, Dax Thomas, and Dawn Grimes-MacLellan

Over the past three decades, extensive reading (ER) has been well-documented as a robust tool for developing L2 skills both in Japan and abroad. For a large portion of that time, ER has relied heavily on paper-based materials; however, in today's digital era, students tend to be more comfortable and confident using technology both inside and outside of the classroom. Nevertheless, appropriate extensive reading materials for students studying EFL at Japanese universities are often limited. Thus, this research project focused on giving Japanese EFL students access to a digital library (Xreading), which allowed them to read books that were appropriate for their level and interest, using a device of their choice. This report discusses the methodology of the quantitative and qualitative data collection as well as the initial analyses that informed the rest of the study.

During the academic year of 2020, 136 advanced Japanese EFL students were given a one-year license to Xreading and were surveyed about their affective responses to the system in order to get a better understanding of their perceptions of reading content through technological means. A mixed-methods approach to data collection and analysis was employed using both quantitative and qualitative data through a pretest-posttest design. During both the pre-test (first phase) in the spring and post-test (second phase) in the fall, the quantitative data was collected using a modified version of Yamashita's (2013) Reading Attitudes Inventory and Xreading's analytics, while the qualitative data was gathered using an open-ended questionnaire.

After the first phase of data collection in the spring, the initial analysis from the pre-test provided demographic information which was used to determine the selection of participants and guide the study. Using a lower-end CASEC score of 500, a convenience sample of 114 participants was selected. Overall, the participants in this study had an average CASEC score of 639 and a reading placement test (ERF) level of 6.3 out of 14. To allow the students flexibility whilst keeping books suitable for a mature audience, the Xreading library was then constrained to levels 3 - 14, omitting books under 2000 words. This yielded a total of 763 accessible eBooks for students to choose from. However, the researchers advised the participants not to read eBooks more than two levels above or below their ERF scores in order to ensure that their digital books were chosen properly.

All participants of this study were asked to read a total of 12 eBooks throughout the year, divided into six books each semester in 2-week interval assignments. After the students read a book, they then took a 5-minute follow-up quiz about the content of the eBook. In order to receive credit in the Xreading system, participants had to achieve higher than 60%

on the quiz with a reading speed lower than 300 words per minute. This setting was modified in the Xreading system to ensure the quality and efficacy of their extensive reading habits. If students could not complete an eBook within the constraints, they were allowed to read more during each 2-week assignment until they had successfully passed a quiz. This means that students were not constrained by the number of books for each deadline; they were allowed to read as many books as they liked throughout the academic year. The average number of eBooks completed by the participants was 8.8 out of 12 during this study.

After the completion of the quantitative analysis of the pre-test data in the spring, the initial findings from the five categories of Yamashita's Reading Attitudes Inventory (comfort, anxiety, intellectual value, practical value, and linguistic value) were presented at the YoJalt Technology MyShare in June of 2020. The analysis of the pre-test inventory demonstrated that while students valued the intellectual and practical aspects of extensive reading, they had a mid to low comfort level and a mid to high anxiety level when it came to approaching books written in English. Nonetheless, the data of both the intellectual and practical value categories were skewed, possibly making it difficult to run inferential statistics in future analysis.

The second phase of the data collection has now been completed, and the post-test data is being processed to analyze the quantitative data first and refine the sample size. Nonetheless, initial analysis of both the spring and fall semesters together has made it clear that more criteria is required to effectively analyze all the data sources through a mixed-methods approach. This means that in order to be considered part of the sample, the participants must have completed a) the ERF, b) Yamashita's Reading Attitudes Inventory, c) the open-ended questionnaire, and d) at least one eBook each semester. After the sample has been adjusted and the quantitative data is processed for the spring and fall again, categorical analysis of the qualitative data (the open-ended questionnaires) will be conducted to further explore students' feelings toward reading digital books.

During the interpretation phase of this mixed-methods research project, the data will converge on the five categories from Yamashita's Reading Attitudes Inventory. Using predetermined thematic categories, the feedback from the open-ended questionnaires will be coded. This coded data will then be mapped to the categories of the inventory which saw changes after the completion of the study. Finally, although all the variables cannot be accounted for, the researchers will briefly interpret the ERF and CASEC scores, noting any significant occurrences or changes. This interpretation cannot be used to make generalizations

about the population that the sample was derived from; nevertheless, it may help guide future studies that use experimental designs.

References

Yamashita, J. (2013). Effects of extensive reading on reading attitudes in a foreign language. *Reading in a Foreign Language*, 25(2), 248–263.

07

研 究 業 績

07

李善姫

【論文】

「場所名詞句との結合頻度に現れる韓国語の移動動詞の語彙的な意味の特徴」明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第15巻（2021年3月掲載予定）

塩谷 祐人

【著書】

永井敦子・畠山達・黒岩卓編著『フランス文学の楽しみかた』（ミネルヴァ書房、2021年3月刊行予定）

担当箇所：「ヨーロッパのフランス語圏文学」（p.156-159）

【翻訳】

ミシェル・ビュトール『レペルトワールⅠ』（石橋正孝監訳、幻戯書房、2021年1月刊行）

担当箇所：「バルザックと現実」（p.90-105）

黒川 貞生

【論文】

坂本慶子、亀ヶ谷純一、森田恭光、黒川貞生、杉崎範英、諏訪間恵美、榎本翔太、大学生の体力とゴルフ実習における主観的疲労、日本スポーツ健康科学誌、7巻、2020（印刷中）

Rika Nagamine, Akira Takano, Tomoyasu Kamiya, Kinya Takagaki, Satoru Suzuki, Sadao Kurokawa. The Effect of Food Containing Pueraria Flower Extract on Energy Metabolism: – A Randomized, Double-blind, Placebo-controlled, Parallel-group study –, Japanese Pharmacology & Therapeutics 48(5): 835 - 841, 2020

篠崎 美生子

【著書】

王書瑋編『日本近代知識人が見た北京』分担執筆「日本近代文学と北京―「未発の可能性」を探して―」三恵社、2020年

施小煒編『谷崎潤一郎中国題材作品研究』分担執筆「「陰翳礼讃」―「われわれ」とは誰か―」華東理工大学出版社、2020年

久保朝孝編『源氏物語を開く―専門を異にする国文学研究者による論考五四編―』分担執筆「若菜 下 やんごとなき人々の葛藤―女房革命が暴くもの―」武蔵野書院、2021年3月刊行予定

【論文】

「賀川豊彦『死線を越えて』の位置」『賀川豊彦学会論叢』2020年12月

【報告】

「◆三・一独立運動、五・四運動百年―2019年秋季韓国大会報告◆ ソウル大会を終えて―感謝と希望と―」『社会文学』52号、2020年8月

徐正敏

【著書】

『平和教育』（韓国語、共著）、ドンヨン出版社、2020年、47―88頁（全体292頁）

『他者の視線、境界線で読み』（韓国語、単著）、ソムエンソム、2020年、全体296頁

『日韓関係論草稿』（単著）、朝日新聞出版、2020年、全体250頁

徳間 晴美

【論文】

「日本語学習者の主体的選択に委ねられる敬語学習への向き合い方」『待遇コミュニケーション研究』第17号、52-67 2020年2月

【調査・研究報告】

「大学における正課外の日本語学習支援のあり方を考える ―日本語相談室の立ち上げと今後の展望―」明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第15巻（2021年3月掲載予定）
執筆者：徳間晴美、山内薫

【学会発表】

「待遇コミュニケーションの観点を意識したビジネス日本語科目に関する考察 ―問題集を活用した実践を例に―」韓国日語教育学会・言語文化教育研究学会 共同開催2020年度国際学術大会（第37・38回）オンライン学術大会（2020年12月5日）

中野 綾子

【論文】

「〈国際会議報告〉ベトナム社会科学院社会科学図書館和古書コレクション（フランス極東学院旧蔵書）その課題と可能性 所蔵資料からみる日本研究の様相 ―洋装本の日本十進分類法（NDC）での分類から―」『リテラシー史研究』（14）リテラシー史研究会、2021年1月

【学会発表】

「社会科学院図書館和古書コレクションからみる日本研究の様相 ―洋装本の日本十進分類法（NDC）での分類から―」The International Conference “Ancient Japanese Book Collection of the Social Science Library-Issues and Potential-” (Vietnam Academy of Social Science Institute of Social Science Information) 2020年10月14日、オンライン開催

パネル発表「研究リソースの可能性を拓く ―『榛葉英治日記』調査から―」「榛葉英治「乾いた湖」の映画化と原作 ―映画と文学の生存戦略―」（パネル発表者：和田敦彦、河内聡子、田中祐介、デイスカッサント：康潤伊）日本近代文学学会2020年度11月例会、2020年11月28日、オンライン開催

【その他】

「陸軍恤兵部発行『陣中倶楽部』総目次および解題』『リテラシー史研究』（14）リテラシー史研究会、2021年1月

野副 朋子

【論文】

Wang, F., Itai, R. N., Nozoye, T., Kobayashi, T., Nishizawa, N. K., & Nakanishi, H., "The bHLH protein OsIRO3 is critical for plant survival and iron (Fe) homeostasis in rice (*Oryza sativa* L.) under Fe-deficient conditions. " *Soil Science and Plant Nutrition*, 1-14., 2020.

野副 朋子 安部 淳、「植物の栄養獲得機構に関する実験実習」、明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第15巻（2021年3月掲載予定）

【学会発表】

「都市型農業に適した小型植物工場における作物の鉄栄養に関する研究」、日本土壌肥料学会（2020年、岡山（オンライン開催））

「乾燥地でも生育できる作物の開発を目指して：ストレス特異的な根細胞内構造の解析」、The analysis of the stress induced cellular compartments aiming to generate the super crop for drylands 鳥取大学乾燥地研究センター令和2年度共同研究発表会（2020年、鳥取（オンライン開催））

山内 薫

【論文】

「大学における正課外の日本語学習支援のあり方を考えるー日本語相談室の立ち上げと今後の展望ー」明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第15巻（2021年3月掲載予定）

執筆者：徳間晴美、山内薫

【学会発表】

「日本語学習者の移動性からみる「学習と人生のつながりの軸」の形成」日本語教育学会大会

2020年度春季大会、一橋大学。(2020年5月31日)

【その他】

「ひとの生活と移動性を踏まえた「生涯にわたる言語学習」」『生涯学習研究e辞典』
<http://ejiten.javea.or.jp/content27520001.html> (登録年月日：2021年1月26日)

Elam, Jesse

【論文】

Promoting intercultural competence in the Japanese classroom. *Korea TESOL Journal* 16(1): 221–233, August 2020.

「The effects of policy and school structure on minority groups in the United States」
 Jesse R. Elam, Ryan L. Whitson 明治学院大学教養教育センター紀要『カルチュラル』第15巻(2021年3月掲載予定)

【学会発表】

Japanese university students' attitudes towards extensive reading in the digital age. JALT Yokohama TECH MyShare (Online). June 7, 2020.

◆上記のほか、所員の業績を、下記URLにて報告しております。

<https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?courc=270000>

2021年3月31日 発行

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 SYNTHESIS 2020

編集代表	嶋田 彩司
発行者	嶋田 彩司
挿画	土方 淳代
発行	明治学院大学 教養教育センター付属研究所 〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518 電話 045-863-2067
印刷	相和印刷株式会社

Printed in Japan

